
とある兵士の受難と幸福

aine

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある兵士の受難と幸福

【Nコード】

N5736J

【作者名】

aine

【あらすじ】

BF2142 (PC game) × オリジナルファンタジーワールド
近未来FPSの兵士が魔法の世界に迷い込んだらという一発ネタ。

重火器片手にモンスターとやりあうような、やりあわないような。

* 注意事項 *

同名の短編小説の続きとなります。
一章は短編と同じ内容となっています。
気が向いたらの更新になります。

主人公がチートを使います。

とはいえっても、魔法という範疇に収まるかも知れませんが。

(追記：収まりそうにないです)

とりあえず主人公がTUEEE系ですので、そういうのが駄目な人は回れ右で。

*どうしても言い事ですが10話削除

Round 1 - 1 (前書き)

一発ネタ。

B F 2 1 4 2 (P C g a m e) × オリジナルファンタジーワールド
近未来FPSの兵士が魔法の世界に迷い込んだらという一発
ネタ。

同名の短編の続編となりますが、一章は短編と同じ内容です。

Round 1 - 1

さて、唐突な書き出しですまない。

私もこの状況をどう書き出せばいいのか考えあぐねている。

だが拙くとも私が体験した出来事を手記として綴ろうと思う。

そしてペンを置く時は願わくば故郷の土を再び踏めていることを願うて。

まずこの本を何らかの理由で手に取った方へ

私の名前はトーヤ・トウゴウ、帰るべき道を見失った異世界来訪者である

信じぬかも知れぬ、いや信じられぬのかも知れぬだが私は、はつきりとこの世界とは違う世界からやってきたのだ。

証明することは文字だけでは難しい、だがいくつもの物証を所持していることをここに記そう。

残念に思うのはそれらをこの文を読んでいるあなたに提示できないことだ、だから、そう、これから記す事が真実で合ったと証明する手段を持たない。

だがもしよければ文字を追ひ、ページを捲っていただきたい、私がこの世界に居た証として。

私がこの世界へと足を踏み入れたのは、いまよりも前、ヒルガルト大陸が激動の時代へと突入する王国暦1040年のことだ：

アラミス王国暦

トーヤ・トウゴウ手記書き出しより

私のいた世界は、発達した機械文明と文化により二度の世界大戦を経験し、その後は緩やかな緊張に包まれながらの経済戦争と、発展途上国を舞台とした代理戦争、そしてテロリズム、利権と殉教精神による戦争に彩られた歴史を歩んできた。

だが、それでも私の居た国だけを見れば、100余年に渡る緩やかな平和を謳歌し、人々は不自由の中にある自由を甘受していた。私達の年号で21世紀の終わりまでは、であるが。

22世紀の初頭の事だ、私のいた世界に突如として大氷河期が訪れた。

次々と土地が分厚い氷と雪に埋もれ、土地と資源が次々と失われていった。

そして、西暦2142年、我が世界の人類は真つ二つに陣営を分かち、残された土地と資源を巡って争い始めた。

ヨーロッパ連合”EU”、アジア連合”PAC”、血で血を争う戦争を始めた二大勢力。

私も今でこそこのように話す事ができるようになったが、

私も”PAC”の一員として、この無意味な、しかし避けられなかった戦争を駆け抜けていたのだ。

我らがPACは資源と作物の実る土地を求めてEUへと進行、アフリカ大陸北部、そしてヨーロッパに置ける戦闘を勝ち抜き、一時はEUをアフリカ南部へと追いやる事にまで成功した。

だが、2145年、枯渴寸前の資源と伸びきった補給線によりもはや息切れる寸前であったPACは、EU軍の反抗作戦の前に敗退を重ね、ついにEU軍の反抗はドイツにまで達した、第二次世界大戦から再び、またもライン川が重要な戦略防衛ラインとなったのである。

そして2145年3月7日、奇しくも第二次世界大戦でアメリカ軍第9装甲師団がレマーゲン橋を渡ってから ちょうど200年後のその日に、EU軍はライン川東岸に足場を築くべくレマーゲン橋への進軍を開始した。

そして同時にその日は、私がこちらの世界の土を踏む原因となった日でもあり、私もその戦場に立っていた。

PAC軍第11独立歩兵大隊、第4中隊所属、第3小隊隊長、トーヤ・トゥゴウ、階級は戦時中尉。

独立大隊などと多少カッコのつく名前ではあるが、ようは壊滅した師団の生き残りを掻き集めて作ったあり合わせの部隊のことだ。

そしてヨーロッパに陣取るPAC軍には、もはや装甲兵器を運用するための燃料はほとんど残っていなかった、それはEU軍も同じではあったが、元々ヨーロッパはEUの領地、補給線の短さの差がEUに装甲兵器の使用を可能にさせていた。

PACは廃棄された装甲車の燃料タンクの底からすらも掻き集めた燃料により、なけなしの機甲戦力を整えた、とはいえEU軍の進行を防ぐことができるとは末端の兵士ですら思っていなかった・・・。

PAC戦略防衛ライン Remagen Bridge

頭の上を銃弾が飛び交う、こうして打ち合いはじめてから数時間が立った様に感じるが、目の前に表示されるヘルメットと一体型の眼前ディスプレイである、HMDヘッドマウントディスプレイに表示される時間はまだ10分しか立っていない事を示していた。

「ヤコフ！ヤコフはいるか！」

コンクリートブロックと鉄塊で構成されたレマーゲン橋、その橋台の地上部分が二階構造になっているのを幸いにその屋上に陣取り、コンクリートのフチをバリケード代わりにEU軍と銃撃戦を行っていた。

轟く銃声と、橋上に陣取ったAPCと戦車が放つ砲声に負けぬように声を張り上げ部下の名を呼んだ。

「ここにおります！」

敵に射線をとらせぬように、背を低くしながらヤコフは駆け寄ってきた。

だが、その間にも一人の味方が不用意に顔をだし、敵の狙撃兵のSスナイパーライフルRに頭を打ち抜かれていた。

「くそつ、馬鹿野郎が！」

思わず罵りの声をあげる、だが時間はまっではくれない、無理やり思考を切り替えてヤコフへと顔を向ける。

「立て籠もっているだけじゃジリ貧だ、おまえはAlfa、Bravo分隊を率いて右の高台の上を奪還しろ、俺はCharlieを引きつれて左方に火線を誘導する、いけっ！」

「了解しました！」

ヤコフは小さく敬礼すると、無線で同じ内容を聞いていた分隊員を引き連れて橋台の右へとかけて行く、それを視界の端に治めながら私は橋台の左へと駆け出す。

「Charlie分隊はついてこい。残りはここを死守しろ！」

何名かが頷いたのを確認しつつ、私は勢いよくフチを乗り越え地上へと身を躍らせる。

私に気づいた敵兵の放った銃弾が、体の至近を駆けていく。だが当たりなどはしない、こんなところで死んでたまるか、そう思えば玉は自然に体をそれていく。

もちろん根拠などない、だがそうでも思わなければ、こんな銃弾の雨の中を駆け抜けるなど出来ない。

橋台の至近に立つビルの影まで一息に走りつづけた、一拍置いて着弾する敵の銃弾はコンクリートの壁面に弾かれてこちらには届かない、遅れてCharlieのやつらがやってくるが一人も欠けてはいない。

だが敵も素早い、反対側からすでにこのビルにとりつき、ビルに設けられている外周通路にまで迫っていたようだ、張り付いている壁面の頭上から足音が聞こえる。

ネックマイクによる無発声無線でCharlieに指示をだす。

数名が強化グレネードを通路へと放り投げる、同時に援護兵が最新鋭の歩兵ソナーを設置する。

敵の慌てる足音と同時に、ヘルメットに内臓され隊員同士をつなぐネットワークデバイス、Netbat^{ネットバット}を介して歩兵ソナーの情報が共有される。

HUDに表示された敵は6名、いける。

「時間をあたえるな！二人は壁を回って反対から、残りはつつこむ！」

部下の肯定の返事を聞きつつも、すでに体は通路へと繋がる階段へと駆け出している。

グレネードはただの牽制だ、現に敵に被害を与えられてはいなかったが、敵に混乱と通路内を押し戻す事に成功している。

敵が再び統制を整える前に射線に収めれば不意をつける。

経験から確信を得ると、フルで20kgを超えるアーマーと武装を物ともせず階段を駆け上がる。

数メートルの直進の直後、角を直角に伏せながらも飛び出す。

「ドンピシャだ！」

敵兵は3人ほど見えたが、隊列が乱れており、こちらの射線上に一直線に並んでいた。

敵はTKを恐れて後ろ二名が即応できない、その間にも私は引き金を引いていた。

独特の音を日々かせながら、私の持つアサルトライフル”H - AR

Baur”がマズルフラッシュとともに弾丸を吐き出した。

強引に銃のリコイル（銃の跳ね上がり）を押さえつけフルオートでなぎ払う。

敵兵がもんどりうつて倒れる。

ナノテクノロジーと高分子素材の結晶であるボディアーマーを銃弾が貫通するのはよほど至近でなければならぬ。

ゆえに私の撃った弾は特に装甲の厚い心臓周辺は打ち抜いてはいなかったが、連続で銃弾が着弾する衝撃全てを吸収することはできないのだ。

強烈な衝撃は兵士を心停止にまで陥れる、大抵のやつはそのまま死ぬ。

だが、勝利の余韻に浸る暇も無く、途中に設けられたビル内部へと繋がっている通路より敵兵が現れる。

しかしながら、その様子も歩兵ソナーがNetbatを介して送ってきている情報により容易に予測がついていた。

半分以上を使ったARのマガジンを入れ換えることなどせずに、余裕をもちさえして、AR下部に取り付けられた対人口ケットへの切り替えスイッチを左手でおす。

PK74 - AR - Rocketは一部の功績のあった歩兵へと優先配備されている新型装備だ、特殊な合成燃料化合物を使用し、さらに銃に内蔵されているFCS（火気管制装置）とヘルメットのHMDの連動により任意の距離でエアバースト（空中炸裂）を行うことができる軽対人口ケットである。

この登場により戦場の概念は塗り変わったといってもいいものだ。それを敵があらわれるであろう丁字になっている曲がり角へとセツトしていた

敵の体の一部が見えた時点で躊躇い無く引き金を引く。

Baur下部の発射口から、風きり音を響かせながら飛行し、まさに最高のタイミングで爆発する。

敵兵の一人を殺傷し、後ろに続いていた二名にも衝撃を与えた。

すかさずに、追いついてきていた部下が追撃をかけ殲滅する。

もはやこのビル内に敵はいない。

外から回り込んだ味方から通信がはいる、敵の後続を足止めしているようだ。

そうだ、もつとこちらに注意をそらせ。

その分だけヤコフの成功率が上がる。

ビルの外から思い出したかのように飛んでくる敵のARロケットを避けつつ、通路から頭をだし、こちらもロケットを放つ。

一瞬視界に写るのは歩兵だけで二個中隊はいそうな敵兵の影だ。

それに大して此方の歩兵戦力は一個中隊のみ、ここが突破されることは、PACのヨーロッパ本部ライブチヒへの道を明けてやる事になる。

だというのに、この兵力差。

「無能な指揮官め……」

レマーゲン橋攻略戦、敵のEU軍は開始早々攻撃ヘリにより制空権の確保に成功してしまう。

PACの攻撃ヘリも果敢に応戦はしたのだが、その全てを撃墜されてしまった。

この時代には、もはや燃料と整備部品を大量に消費する航空戦闘機は姿を消している、ホバリング機構によりどんな戦場でも活躍でき

整備もより容易なジェットヘリにとって変わられていた。

制空権を取られたPACは敵の輸送ヘリによる敵兵の渡河を許してしまう。

工兵の持つ対空ミサイルSAAWにより、その幾つかを打ち落とすが、全てを落とす事はできなかった。

後は泥沼である、PACの指揮官は慌てたように兵を戻し、渡河したEUへと向かわせたのだ。

EUがその隙を見逃すはずもなく、敵の歩兵輸送者の迅速な兵員輸送により守備に残っていた部隊も橋の橋下駄まで追い詰められてしまう。

もはや残ったのは一個機甲中隊と私が所属している第4中隊のみである。

大隊の残りは渡河に成功した敵に苦戦している。

そしてさらにだ、他の小隊の指揮権は私にはない、こうやって分隊を率いて小手先の反撃をするのがやっとのありさまだ。

いくつかの小隊は私の動きに追従してくれているようだが、大半の物はただ動かずに打ち合いをしている。

「押し込められて終わることがなぜわからない。野戦ではない、市街地戦なのだ、やりようはいくらでもあるだろうに」

そんな私の呟きも虚しく宙をさまようだけだ。

「ヤコフより小隊長へ！やりましたよ！高台を制圧しました！」

とそこに朗報が舞い込む、これで多少はやりやすくなった。

「よくやった！引き続き防衛しろ」

「了解！」

ならば私がビルで立て籠もる必要はない、他の小隊が分隊を増派してくれたお陰で、このビルもそうそう落ちそうではない。

もっと指揮のしやすい場所、つまりは高台へと移動するべく、来た

道を引き返す。

それから何百、何千の弾丸を撃ちはなつたのか。
だがそんな一時の優位もすぐに失われた。

数で押しているのにいつこうに落ちない橋に業を煮やしたEU軍は
重戦闘装甲車ゴリアスを一斉に投入した。

さらに悪い事に敵の渡河した部隊が拠点を占拠することを許してしまふ。

それは敵の輸送ヘリによる渡河を食い止めることが不可能になった
ことを意味していた。

圧倒的な防御力で近づいてくるゴリアスの群れに対して有功打を打つことができず、その上ゴリアスの装甲を盾に近づきながら、対戦車ミサイルを放つ敵工兵により味方の機甲戦力が次々と落ちていく。私のHMDに表示されている味方のバイタルサインが加速度的に死亡を表す表示へと切り替わっていく。

そしていまさつき私の副官であつたヤコフのバイタルも消失した。
もはやこちらの戦力は3割を割つた、防衛に失敗したのだ。

だが私の心はいっそ晴れやかですらあつた。

「ヤコフ、マリー、リリウム…共に戦つた戦友達よ。俺もやつとそちらへいけるようだ」

長く終わりの見えない戦いに疲れていた。

やつとこの虚無感から開放されるのだと、私は嬉しくもあつた。

「だがまだだ、ただでは、ただでは死なん。一人でも多くの敵を道連れにしてやる」

やつらに一矢報いずして、先に逝つた友たちに顔向けができるわけがない。

私は全方位無線で味方に対して独断で撤退を許可すると、建物の影に捨て置かれていたホバーバイクHACHIMOTOに乗り込む。
そして弾薬集積所から持ち出したRDX（高性能爆薬によるリモー

トボム」をバイクの全周に貼り付ける。

そのまま起爆スイッチを握り締めバイクのアクセルを一気に全開へと持っていく。

狙うのは敵の指揮車両だ、敵の銃弾がふりそそぐがライフル弾程度ならばバイクの前面装甲で弾ける。

怖いのは敵のAPC（装甲輸送車）に設置された連発式グレネードランチャーだけだ。

それさえ避けてしまえば。

「見えた！」

敵の前線司令官の乗る装甲指揮車両。

私は時折装甲の隙間を抜けてくる銃弾が当たることともいわずにただ、指揮車両だけを指してつきすすんだ。

真後ろには最新のモーションマイン（高性能吸着地雷）が追っかけてきているはずだ、だがフルアクセルならばこちらの方が早い！

ことここに来て、慌てたようにアクセルを踏み逃げようとする指揮車両だったが、もう遅い。

RDXを爆載したまま私は車両へとアクセルを吹かす、ぶつかる直前私は飛び降りると同時に起爆スイッチを押した。

強烈な衝撃派が体を叩く、私はそのまま地面へと叩きつけられ、そして…。

うすれゆく意識の中、なぜか目の前に地面の裏側が見えた気がした。地表の下には土があるのだから、そんなはずはない。

だが自分は確かに下へと落ちている感覚がある、そして自分の周りには真っ黒で塗りつぶされたように何も無い。

ならばあれはなんなのか、どんどんと遠ざかっていく一枚の絵の様にいままで見ていた地面をそっくりかがみ移しにしたあれは。

そこまで考えて、意識が闇の中へと落ちた。

Round 1 - 1 (後書き)

ちなみに、地面の裏側云々というのは3D Gamerならわかると思いますが、3Dゲーム特有の現象で時折地面の当たり判定を貫通して、地面のテクスチャをキャラが通過してしまうバグというか、仕様のような不具合のことです。

その後はゲームによって違いますが、永遠に落ち続けるものもあれば、なぜか急に空へと瞬間移動して、そのまま地面に叩きつけられるものなど、さまざまです。

そんな中には、異世界に通じているものがあつたりするかもね、という妄想が執筆動機です。

Round 1 - 2

急速に意識が浮上するのがわかる。

瞼の上から目を刺激する強い光を感じる。

その眩しさに手を翳しながら目を開くと、見慣れない天井が見えた。

「ここは…天国か…」

「ちよつと、勝手に死なないでよね」

寝ている自分のすぐ隣に誰がいる。

その声の近さに舌打ちしながら、飛び跳ねるように起きると、まるで軽業の様に壁際へと身を寄せ声の主へと視線を向ける。

このときはEU軍の捕虜になったのだと思ったのだ、あの爆発で生きているとは自分もつくづく悪運が強い。

そう認識したあとは条件反射的に体が動いてしまっていた。

だが、声を掛けた主を視界に入れて私は混乱した。

まるで軍人には見えない、それどころか医療関係者にすら見えない。美しい女性だ、青い目に金の長髪がよく似合っている。とても気立

てが良さそうであり、ただただ私の行動に驚いているようだ。

敵兵の看護に一般人を使ったのか、私はそのような予測を立てると相手の行動に憤りを覚えた。

なんという危険なことを。

自分がその敵兵であることを棚に上げて彼はどうしようもないやらせなさを感じた。

そして、さすがに自分の行動のまずさを悟る。

いらぬ恐怖を感じさせてしまったのではないか、そう判断する。

ならば当事者としてできるだけ、後に引かぬように緊張をほぐしてやる必要があるだろう。

PTSD（心的外傷後ストレス障害）にでもなられたら可哀想であ

る。

ゆっくりと両手を挙げて敵意が無い事をしめしながら、できるだけ言葉を選んで話しかけた。

「すまない、驚かせた。だが敵意は無い、私も驚いただけなのだ許して欲しい」

できるだけ柔和に言った積もりだったが、いつもヤコフに隊長はぶつちようらですねと言われていた手前、うまくできたかは自信が無かった。

だが呆氣にとられたような顔をしていた女性だったが、しばらくするとお腹を抱えて笑い始めた。

「あはははは…なにそれ、カエル見たいに飛び跳ねたとおもったら、驚いただけなんて…あはは…あなた変すぎよ！」

息をするのも億劫そうに笑いつづける彼女。

そんなにも笑いを誘う行動だったのだろうか？

だがむしろこ気味よくほがらかに笑う彼女を見ると、どこか懐かしい気がした。

ひさしく感じた事の無かった平穏な日常の雰囲気とでもいうのだろうか、とてもそれは心地よいものだった。

気づけば釣られて私も笑っていた。

しばらく私と彼女は一緒になって笑いつづけた。

やっと笑いが収まったのか、ニヤリとしながら彼女が手を差し出した。
てきた。

「私はリグレット・ヴァシアよ、あなたは？」

私はその手を握り返しながら答える。

「トーヤ・トウゴウ戦時中尉だ、まあよろしく」

だが続けて彼女から帰ってきた言葉に私は驚愕する。

「トーヤ、が名前でもいいの？でも変な家名ね、トウゴウセンジチュウイなんて」

私は驚くことしかできない、まさか彼女は階級の事を知らないのか？そこの子供でも中尉という階級について理解しているはずだというのに。

「ちよつとまってくれ、中尉は階級だ、階級はわかるだろう？」

だがあつさりと私の予測は覆された。

「カイキュウって？爵位のことかしら？トーヤって貴族様だったの？！」

口に手を当て、行動でも驚きを示しながら話す彼女。

その様子はとてもではないが嘘を言っているようには見えない。

「い、いやちよつとまってくれ。本当にわからないのか？じゃあ軍はどうだ、EU軍かPAC軍は知っているだろう？」

ちよつと考える仕草をしたリグリットだったが、すぐに知らないと答えた。

「この辺りで軍隊っていったら、領主様の守備隊かしら、でもそんな大層な名前は聞いた事が無いわ。あとはアラミス王国軍の駐屯地が隣町にあるけれど…」

私はあたまの中で必死にその話を反芻する、領主に王国軍だと…。彼女はやはり嘘をついているのか、いやだが。

そしてふと気づくのだ、窓から差し込む暖かい光。

建物が木造なのは、古い家屋なのだろうと無意識に無視していたのだが、この光は何だ？

この暖かくそして温もりを感じる光は。

私ははやる気持ちを抑えながら、ゆっくりと窓に近づき、スライド式のその窓を全開にした。

私は言葉という物がでてこなかった。

なんだこれは、なんなのだ。

そこには見渡す限りの緑と、頭上に光り輝く、それは紛れもない太陽。

だが、私の知っている太陽はこんなものではなかった。もっと冷たく、そして雪に反射して身を焦がす存在だった。

だがどうだ、緑に反射して光るこの光景は、太陽とは、このように神々しいものであったのか・・・。

私が生まれたときにはすでに氷河期が初まっていた。

暖かいと感ずることなど稀であった。

赤道直下ですら雪がふるのだ。

私は目を見開いたまま、流れ落ちてくる涙を止めることができなかった。

一分、一秒でも長くこの光景を視界に納め続けていたかった。

「ちょ、ちょっといきなり泣き出したりしてどうしたのよ?！」

いつのまにか隣までやってきていたリグレットが私の顔を覗き込んで慌てている。

私は、そんな彼女にすばらしい世界だ…と呟いた。

リグレットはそんな私の顔をしばらく見つめていたようだが、急に私の腕に体重を掛けるように腕を組んできた。

「本当に変な人ね、でも…。そんな風に涙を流せるなんて私は嫌いじゃないわよ」

そのあと太陽が動き建物の影にはいるまで私はずっと太陽を眺め続けていた。

リグレットもなにもいわずに私の傍に居てくれた。

そしてだが、私はずっと後になって彼女がこのとき思っていた事と、腕を組んできた理由を知ることになる。

それはまた別のはなしだが。

私には一瞬の時間のようであったが、実際は大分時間がたっていたようだ。

すっかり昼食の時間を逃してしまったようで、リグレットが用意していた食事もさめてしまっていた。

つき合わせてしまった彼女に申し訳なく思い、あやまったのだが、彼女は気にしないでと言うと、てきぱきと新しく料理を作り直し始めてしまった。

何か手伝おうとはしたのだが、彼女にそれとなく断られてしまい、いまはただ居間のテーブルに座っておとなしくしている。

なんとなしに部屋を見回して気づいたのだが、家具や扉のどれもが木造なのだ。

木材が貴重品であった私からすると信じられないことである。

さらに驚いた事に、料理に使う火のことだ。

電気式でもない、ましてやガス式でもなさそうなのだ。

もちろん薪でもない、形としてはこちらでいう、コンロと言っていいサイズと形をしているが、どこにも外部から燃焼物を供給するようないなものがない。

次に思い浮かんだのはカセットコンロだ、あれならばスタンドアロ―ンで火を灯せる。

だが携帯サイズのカセットでは長持ちせず不経済だ。

私は意を決して尋ねたのだが、返答はあっさりとしたものだった。

「ん、これ？魔石調理器よ、すつごく便利なのよね。あたなの家にはなかったの？」

「似たような物はあったが…」

私はそう言葉を濁すだけで精一杯だった。

魔石とは一体なんだ。

だが彼女は楽しそうに料理に戻ってしまった。
きつと質問をしだせば私はとまらないだろう。

それは料理をしている彼女に悪い気がした。
だからまたとりとめもなく自分だけで考えようとするが…、やめる。
世界にはわからないこともたくさんある、後で彼女に聞くのが一番
早いことに気づいたのだ。

私はそう問題を先送りになると、漂い始めたよい匂いに食欲を刺激
されながら、またも外を眺めはじめた。

出来上がった料理は、大きな豆のはいった、こちらでいうミネスト
ローネの様な物と若干固めのパン、そしてスライスされたハムと、
マカロニの様なものだ。

それらが皿に山盛りで出てきたのだ。

軍に居た頃は腹いっぱい飯を食べた事など数えるほどしかない、
私はその経験からとまどってしまい、しばらくそれらを前に手を伸
ばし掛けては引つ込めるといふ動作を無意識にしていたらしい、
らしいというのは私は自分で自覚がなかったのだ。

彼女に、食べていいのよ？と笑われながら指摘されて始めて気づい
たのだ。

私は妙な緊張感を持ちながらスープに口をつけた、そのあまりの美
味しさは覚えているのだが、あとのことをよく覚えていない。

そのままスープを一気に飲み干し、手当たり次第にパンとハムを食
い漁った気もするのだが、覚えていなければそれは無かった事だ。

そんな野蛮人のように食事をしたなど末代までの恥である。

きつと私はきつと行儀よく、よく噛んで食べたのだ…そのはずなの
だ。

だから、彼女から、そんなにお腹がすいていたのね、でももつとよくかんで食べないと駄目よ？と笑いながら怒られたのは夢なのだ…。

ともかくも、食事とはこのようにうまいものであったのか、私は軍用レーションと、配給される栄養だけを重視された食事しか知らなかったことを後悔した。

そしてこの美味しさが素材のうみみだけでなく、彼女の料理の腕であろうことも、おぼろげながらに理解したのだ。

食事が終わったあと、私は彼女と肩を並べて食器を洗っている。

これくらいならば役に立てるとおもったのだ、汲み置きของタンクに蛇口をつけた構造の水場で私は皿を洗う、意外とコツがいるようで彼女に汚れがのこっているとなんとも怒られてしまった。

もつとも彼女はやさしく指摘するだけで、声をあげたりはしないのだが。

私はこのようにゆっくりと時間が流れているような心境はしばらくぶりであった。

両親に甘えるだけの何も知らぬ子供であった時以来ではなからうか、あとは空腹と、軍事学校へ進んだ事でいつもなにかに急き立てられているようで、心休まる時などなかったような気がする。

そして、ああそうだと思い出す。

「リグレット…。料理美味しかった、ごちそうさま」

私はいつの間に食事の際にいただきますとごちそうさまを言わなくなったのだろうか、両親にあれほど言われていた事であったのに。

「ありがとう、でも大したものを出してないのよ？あの食べっぷりには驚いたけれどね」

「それは言わないでくれ、本当に美味しくてな。それにあんなに腹いっぱいのご馳走を前にしたのは初めてだったんだ、勘弁してくれ」それを聞いた彼女の顔に一瞬悲しげな影がよぎった気がしたが、すぐに彼女は笑顔になると

「じゃあ明日からもお腹いっぱい食べさせてあげるからね、覚悟しなさい」

「それは嬉しいような、恐ろしいようなだな」

「ふふふ、冗談よ。でも駄目よ、いっぱい食べないと大きくなれないんだから」

私はもう30にさしかかる、さすがにこれ以上大きくは横にしかないぞ、と言おうとして、一步早く彼女が皿洗いを終え皿を抱えて棚へといってしまった。

「まったくマイペースなんだか、なんなのか」

言うべき言葉を見失った口はそのようなことを呟いた。

私は自分の分の食器を洗うスピードを上げ、荒い終わると彼女のまねをして食器棚へと陳列した。

彼女は家の奥へと行ってしまったようで、なかなか帰ってこない。

私は手持ち無沙汰になってしまい、しばらく居間をふらふらしていたが、あまりに遅い彼女が心配になって、奥へと探しに行った。

億といっても居間の扉と、もう一つドアを開けるだけだが。

開けるとまた、新しく扉が二つ現れた、私は人の気配がする方を開けて固まる。

そこは浴場であるようだったのだ、だが幸いにも途中にカーテンが張られ、彼女と直接対面する事にはならなかったが。

「あ、ごめんねー？すぐにでるからそしたら、はいつていいよ」

「あ、いや、その。すまない。まさか、その風呂場であるとは…」

軍隊なら仲間の女性の裸体など見慣れたものだ、ドギマギすることもないのだが、彼女が相手だとどうも調子がでない。

しどろもどろになりながら、そそくさと居間にもどろうとしたところで、カーテンから彼女が顔だす。

「それとも、一緒にはいる？」

ニヤっとしたその顔は、子供をからかっているようだった。

「遠慮するー！」

私は顔を赤くしつつも、逃げるように居間へと舞い戻った。

その後、風呂場から上がってきた彼女は真新しい寝巻きに着替えており。

私もつづけてシャワーを浴びる事にした、どうやらさきほどの魔石調理器の親戚のような構造であるらしく、ある程度私達の湯沸かし器に近い存在のようだ。

そのお陰で違和感なく使用でき、さっぱりとすることができた。服に関してだが、彼女の父親の物を貸してもらった。

やはり両親もいるようだが、その割にはこの家には彼女だけである。あまり他人の家庭状況をずかずかと聞くのは失礼だろう、いづれすこしづつ話を振ってみたいと思う。

あとは私が最初に眠っていた部屋をあてがわれた。

シートもいつの間にかに新しい物になっており、感謝しながらも私は意識がもどってからこちらで始めての夜を迎えた。

まだわからないことだらけではあるが、きっとなんとかなるだろう。意識が落ちる寸前、また故郷の言葉を思い出した。

「明日は明日の風が吹く…さ」

Round 1 - 3

鳥の鳴き声で目が覚めた。

私は窓へと近づくと、開け放ち、湿ったような朝の空気を大きく吸い込む、それはどこか甘みさえ感じる。

これはこちらに来てからの私の日課になっている。

あれから一週間程がたった、その間にさまざまな発見や新しい事をリグレットから教わった。

私は朝もやの掛かった林を見つめながら、大雑把に知識を整理することにした。

まずこの世界、この惑星は”地球”ではないようだ。

太陽も月もあるが、動植物の体系が違うし、なによりも歴史が大きく異なっている。

そしてなによりも、一番違うのはこの世界には”魔法”が存在することだろう。

魔法、私も最初リグレットから聞いたときはにわかに信じる事ができなかった。

だが、魔石調理器の構造や、実際に簡単なものをリグレットに見せてもらった事で信じざるを得ないと半ば無理やりに自分に納得させた。

魔法については、考えると長くなるので、最後に回す事にする。

次にこの世界の情勢だ、魔法というイレギュラーがあるため所々で我々が辿った技術発展とは異なった発展をしているようだ。

また魔法が関係しているのだろうか、魔物とよばれる凶暴な生物がいるようで、それに対応するために多くの我々にはなかった社会体制がぎずかれているようだ。

まず私が居るここは、ヒルガルト大陸と言っらしい、この星には他

にも大陸があるのかはわからない、リグレットは知らないと言っていたが、まだ発見されてないだけという可能性もある。

つぎに国だが、ここはアルテミス王国の外れにある村だということだ、特産品なども特にないが、山と川に恵まれていて中々に住み心地は良い、すこし川沿いに下ったところにある隣町は、そこそ規模が大きい商業都市らしく、隣国との中継地点にもなっているのだとか。

主な交通機関は馬車のようだ、ただし空路が無いわけでもないらしい、ワイバーンやスカイドラゴンといった魔物を飼いならして使用するのだとか、一度見てみたい。

戦争だが、いまはどこも行っていないのだとか、ただアルテミス王国は大陸の東にあるのだが、大陸の北に存在するレガリオ帝国がきな臭いとか、巷に流れている噂なので信用はできないのだが。

ああそうそう、そして魔法なのだが、これが便利なのだそうだ。

素養のある人間ならば呪文と呪印によって、さまざまな物理現象を引き起こすことができる。

その威力たるや、達人が使えば城を一人で落とすこともできるらしい。

そしてだ、この魔法を素養のない人間が使えるようにしたものまであるのだ。

それが魔石とよばれる石を使った道具なのだが、この家にある調理器具などが魔石道具だ。

これは簡単に言えば、カートリッジシステムと同じような考え方らしい、事前に魔力と呼ばれる魔法を行使するのに必要な元素に手を加えて、特殊な形に返還して封入するのだそうだ。

そうすることによって、人の手を介さずに道具毎に設定されている魔法が発現するのだとか、動かなくなったら魔石を入れ換えればまた使えるようになるためとても便利だとリグレットが言っていた。

それに魔石は安くはないが、日常生活では頻繁に取り替える必要が無く、意外とコストパフォーマンスも良いのだとか。

これらのことは主にリグレットから聞いたことだ、こちらに来てからの数日は私はベッドに臥せっていた。

意識がもどったあと、気にせず動き回ったのがいけなかったのか、急に痛みが全身を襲いたっていらなかった。

数日で嘘のように消えたのだが、その後もリグレットが心配して家から出してもらえなかった。

やっと、出れるようになったので村を回ってみたが、なかなか人間関係には苦労する。

だが比較的好意的に受け入れられてはいるようだ、まあリグレットの人徳のお陰である気がするが。

そのお陰か、やっと昨日働き口が見つかった。

木を伐採する手伝いだ、なんでもこの辺りの木は質が良いらしいああ、これも名産品ということになるのだろうか。

ともかくも、注文が大量に入ったので、臨時だが雇ってもらえることになった。

力仕事ならば望むところである。

リグレットにばかり甘えてはいられない、すこしづつでも恩を返していかなければ。

そうだ、重要な事を思い出し忘れていた。

村の人に聞いたのだが、なんでも俺はヘンテコな服を着て村の近くに倒れていたのだとか。

ヘンテコな服というのはボディーマーのことだろう、それを数人がかりで脱がせると死んだように眠る俺が出てきたそうだ。

しばらくそんな怪しい俺をどうするかで意見が割れたそうだが、リグレットが引き取ると宣言すると俺を抱えて連れ帰ったのだとか。

まったく本当にリグレットには頭があがらない、リグレットがいな

ければ死んでいただろう。

ちなみにヘンテコな服もといボディーマーは戻ってきた。

これもリグレットの人徳のお陰か、後で村の男達がリグレットの家まで届けてくれたそうだ。

ちなみに武装などは無かったようで、一応扱いを間違えれば大惨事になるため、それとなく聞いて回ってはいいるが、どうやら本当にないようだ。

まあどの道、弾薬が尽きたらただの鉄の塊である、あってもなくても変わりはないのだが、なんとなく激戦を潜り抜けてきた相棒であるだけに、愛着があつたのだ。

こんなことを考えていると太陽が顔を上げ始めた。

初日から遅刻はできんからな、私は準備をはじめるとリグレットを起こさないように仕事へと出かけた。

林業の朝は早い、なにせ暗くなったら仕事は問答無用でできなくなるのだ。

夜の山林ほど注意しなければいけないものはない、特にこの世界では熊などよりも恐ろしい魔物がいるのだ。

私が集合場所にいくとすでに親方が仁王立ちして山の方を睨みつけるように眺めていた。

「おはようございます」

「おう、早いな。良い心がけだ」

ニツつと笑いながら、私の方を向き、今日はたのむぞと声を掛けられた。

「ええ体力には自信がありますから」

「はははは、そいつぁいい。期待してるぜ」

たわいもない話を親方としてしていると
ぼちぼちと作業員が集まってくる、最後の一人が来たというので数

えていると40名ほどいるようだ。

なかなかの規模である、どうやら若い者にも人気がある職らしく、下は15か6位の少年から見受けられる。

親方に聞くと

「おうよ、この村の木は人気があるからな。稼ぎがいいのよ！」
なるほど、さもあらのである。

また作業員以外にも、剣や弓矢で武装した人間が3名ほど着いてきた。

今度は先輩に聞くと

「ああ、ハンターの人たちだね。魔物が出てきたときの用心だよ。
いい木はやっぱりある程度山奥へいかないといけないからね」

普段は普通の猟師の人たちらしいが、この辺りではそれで十分なのだそうだ。

強力な魔物が現れたことは無いらしい。

もともと、ここ以外ではきちんとした魔物相手には冒険者や傭兵を雇うのが一般的だそうだ。

「ただ彼らを雇うのもタダじゃない、それにうちは田舎だろう？あまり高い給金もだせないしで、冒険者のヤツらは誰もきたがらないのさ」

まあそういうものなのかもしれない。

適当に相槌を打ちながら歩き続けると、先頭を歩いていた親方が立ち止まると振り返ってさげふ。

「よし、今日はここから始めるぞ！班分けはいつもどおりだ、きばっていくぞ！新入りはわしんとこにこい。さあ始めた始めた！」
親方が号令をかけると、作業員たちはおのおのの分担に応じて作業をはじめた。

俺は小走りで親方の下へと駆ける。

「おう、来たな。とりあえずは仕事を覚えてもらわなきゃなんねえ、とりあえずだ木を切った事は？」

「丸太ならあるが、生えているのは無い」

訓練学校のサバイバル演習で斬った事があるだけだ、もちろん素直にしゃべる。

「そうか、まあないよりはましか……。よしついてこい」

私はその後親方から木の切り方と、特に大事だと、安全確認の重要性を指導してもらった。

安全確認の重要性は軍人ならば腐るほど言い聞かせられ、たたきこまれる。

大丈夫だろうと銃口を覗き込んで死んだ奴など腐るほどいるのだ。

そして、銃がもつFFの危険性は肌身をもって実感している、ほんのちよつと安全を確認すれば防げた誤射など星の数ほど事例がある。そういつた経験から実に注意深く説明を聞く私のことを親方は評価してくれたようだ。

さつそく切って見るといわれたので、説明された通りに挑戦する、最初こそノコギリやオノの扱いに四苦八苦したが、丸太を切った感覚を思い出し始めると、後は早いものだ。

元々鍛えていた体力のお陰でさして疲れることも無く一本を切り倒す。

「ほー、なかなかどうして、見込みがあるじゃねーか」

「こんなもんですかね」

私もすこしだけ得意な気分になり、気分がいい。

さあ次は枝を払いこいつを丸太にする作業だ。

そんな調子でやっていたら二本目からは独りでやっていいとの親方の許しを得たので、次々と木を切り倒していった。

もちろんあまりやりすぎるのはよくない、周りのペースに合わせながら丸太を量産していく。

大体5本目を作り終えた時だ、太陽がもうすこしで天頂という頃合のころだったと思う。

突然斜面の一番上の方で作業していた仲間達が駆け下りてきた。彼らは口々に出たぞーと叫んでいる。

「なにがでたんだ？」

私はぼけーっとその様子をつつたって見ていたのだが、親方がすぐにやってきて怒鳴る。

「なにしてるんだ！麓にむかって逃げろ！」

「急にどうしたんですか？」

「魔物だよ、魔物がでたんだ！くそっ、わしは言ったから早く逃げろよ」

そういうと親方は両刃の斧を担いで、斜面を登っていく。

自分には逃げると言いながら、本人は魔物へむかって駆け上がっていくのか。

私はその姿勢に好感を持たざるをえなかった。

「さて、どうするか…」

幸い魔物は私の場所からは見通せない位置にいるようだ、いまなら逃げる事は容易だろう。

だが、どんな魔物が出たにせよ、ハンター3人と親方だけで倒せるものなのだろうか……。

そして私は軍人だ、軍人の本分は戦う事である。

ならば…

「逃げることはできんだろう」

そう呟くと仲間のだれかが放置していった片刃の斧をひっつかみ親方の後を追いかけ始めた。

数分ほど駆け上がると親方に追いついたが、すでに魔物と交戦しているようだった。

その魔物なのだが、見た目は巨大な鳥であった、2m半ほどある

だろうか、ときおり嘶くように甲高い声を上げながら、その巨体と大きな嘴を使つてつつく様な攻撃をしていた。

その威力はあなどれないようだ、ハンターの一人が大きな嘴を避けた際だが、嘴を勢い余つて立ち木に打ち付けたのだが、もののみごとくに木がくだけ、半ばから折れるように倒れたのだ。

アレを食らえば人間などひとたまりもないだろう。

ならば取る戦術は一つだ、ヒット&アウェイでじりじりとダメージを蓄積させていくのが堅実だ。

事実ハンターも親方もそのような戦いをしていた。

「私も助勢します」

そう言いながら斜面を駆け上がり、オオトリの後ろを取ると力任せに斧を叩きつけた。

すると予想よりも身軽な動作で相手が振り向きざま嘴をはなつてくる、間一髪でそれを転がるようによけると、じりじりと間合いをはかる。

手ごたえはあった、ダメージは通っている。

「おい新入り、無茶なことをするなあ」

親方が声を掛けて来たが、その顔は面白そうに笑っていた。

ハンターたちも親方ほど豪胆ではないようだ、挫けてはいないようだ。

回り込んだハンターの一人が弓を放つ、体表に生える体毛のせいで深くは突き刺さらなかったが、オオトリの注意をそらすには十分だったようだ。

そこを見逃さずに今度は、足をめがけて走りより、オノを振るう。

「ガアアアアアアアア」

効いているようだ、痛みに耐えるように声をあげるトリのバケモノ。あいかわらずの軽快な動作で振り向くが、すでに予測済みの動作だ、すでに安全圏へと退避している。

そしてそれに合わせて打ち合わせをしたかのように、他のハンター達が弓を居掛けたり、剣で切りかかりと相手に反撃する間を与える

事無く攻撃を通していく。

悪あがきのようにその巨体で突進をしてきたりもしたが、場所がよかった周りの木々をうまく使う事で、逆に相手を木につっこませ、より優位に攻撃を重ねていく。

もはや相手は満身創痍だ、そろそろトドメをさしてやろう。

私だけではない、そのばに居た全員が勝利を確信した瞬間、強烈な一撃と共に私は吹き飛ばされた。

受身すら満足に取れずに宙を舞い、そして木の幹へと叩きつけられた。

「がはっ」

肺の中の空気が強制的に對外へと押し出される、酸欠により眩暈と衝撃による全身の痺れが襲う。

辛うじて首を動かして確認すると斜面を転がるように倒木が斜面を下っていく。

木が倒れたのか、いや違う。そのような衝撃ではなかった。

「オーガだ！」

剣を持ったハンターがそういったのを辛うじて聞き取る。

体を無理やりに捻り、そちらを見て啞然とした。

まさに巨体、5メートルはあるつかという人型の怪物がのしのしと近づいてきていたのだ。

もしかしてと思う、さっきは奴が木を引きちぎりそれを投げつけてきたのだろうか？

いや、まさかという思いと、状況から導かれる予想に一瞬思考が停止する。

「なにをしておる、にげるぞ！」

親方に無理やり抱き起こされて駆け下りるように坂を下りていく。

もはやすでにオオトリは一目散に逃げ出していたようだ。

影も形も見当たらない。

ハンターたちなどは武器すら放り投げてガムシヤラに前を走ってい

る。

「駄目です、親方。私を置いていつてください。このままでは逃げ切れません」

「なにをいうか、そんな口を聞く前に気合をいれろ、さあ走るんだ。走れ」

だが先ほどの衝撃がまだ抜けていない、今は殆ど親方に背負われている状況だ。

このままでは親方の息があがってしまうし、速度も出ない。

相手が多すぎるゆえの距離の錯覚だろうが、ゆっくり歩いているように見えるオーガだが実際は相当な速度が出ているのだ、このままでは追いつかれるし引き離せない。

村にあいつを連れて行くわけにはいかない。

「私は大丈夫です、だからさあ、手をはなしてください」

「馬鹿を言うでない、わしは誰かを見捨てるなんざ、もう一生しないと誓ったんだ。死んでも離すもんか」

そう喋る親方には、ある種の覚悟がこめられている気がした。

この人は死んでもそれを実行するだろう。

ならば私がなにをいったところで無駄である。

後ろを振り返りつつ思う。

対戦車ライフルであるパイラムがあつたなら、いやアサルトライフルでいい、B a u r が欲しい。

この際拳銃であつても構わない、俺の世界の兵器が武器があつたならば。

ここで死ぬのか…。

だが一度は死を覚悟した身だ、それが何かの間違いで数日間延長されたにすぎない。

そう考えれば別になんでもないことのようにも感じる。

ああだが、リグレットのことだ、彼女の事を思い出す。

あのように太陽の様な女性を私は知らなかった。

そうだ、そうではないか、まだ死ねない。私は死ねない。

彼女に恩を返すまで、いや、彼女を悲しませる原因が私である事など到底容認できない、これは、この気持ちはなんであろうか。

だがいまはそれはどうでもよい、武器だ、戦う術だ、それが欲しい。ああ神がいるのならば。

私をこの世界へと誘った存在に、原因に、意思があるというのならば、私に力を貸せ。

奴を跪かせる術をよこせ！

ばかろうがああああああ。

```
↓Master server connect  
server not running  
play to single:  
find MOD files  
Loaded  
Welcome to the our World  
↓HMD System online  
check at self condition  
config files damaged  
↓all config initialized  
recreate config files  
System all green  
Netbat running  
HMD on screen
```

見慣れない文字列が、自分の眼前に投影される。
なんだこれは・・・、だが一瞬の停滞の後その表示は、戦場で使い
見慣れたヘルメット一体型HMDの物へと変わる。

だがしかしである、いまはヘルメットなどしていないのである、だが目の前には浮かび上がるかのように、HMDの画面だけが表示されている。

HMDは透過型の小型薄型スクリーンに表示されるものであって、決して何もない空間に投影されるものではない。

だがいまは、いまだけはこの奇跡に感謝したい、なにか出来るのだ、きっと。

私は目を血走らせるようにそ宙空のHMDに目を走らせる、そして見つけた。

兵科という本来のHMDにはない、見慣れない表示があることに、従来のHMDもセンサーカメラが捕らえる視線と簡単な脳波によりHMD画面上の操作を行う作りになっていた。

当然のように、この謎のHMDでも同じ動作ができた。

兵科を選択、偵察兵、突撃兵、工兵、援護兵、カスタムという一覧が表示される、その右にはヴィジュアルで装備している兵装が「表示されていた。

私はまよわず突撃兵を選択すると、右に表示されたBaurに目を走らせる。

操作などわかるはずもない、だが直感的にBaurをドラッグすると、その上に表示されていた。なにも装備していない人型のシルエットへとアイコンを運ぶ。

なにか起きる。

そう祈らずには居られない、アイコンをシルエットの上で離れた、するとシルエットの右手側の空欄にバウアーがカチリトはまりこむ。その瞬間、俺は咄嗟に親方にしがみ付いていた右手を離す。

するとどうだろう、右手が一瞬光を放ったあとその手のひらにしっかりとBaurをアサルトライフルを握っていたのである。

慣れた手つきで弾丸を確認する、フルチャージだ。備え付けの予備マガジンもしっかりと付いている。

いける、これならばいける。

親方は前だけを向いて走っている、気づいてはいない。

それに先ほどから体の痛みが急速に和らぎはじめたのだ、そしてもうすでにしびれは綺麗さっぱりとなくなっていた。

「親方、走れる。降りるぞ」

そう声を掛けると、親方が一瞬逡巡したのちに、手を離してくれた。私はしっかりと自分の足で地を踏みつけると、だが前に走りはせずに後ろを振り向く。

すぐに親方が気づいて足をとめた。

「おぬしやはり！」

走れるというのが嘘であるとおもったのだろう、引きずってても再度掴みなおそうとして、私が構えているものに気づく。

「なんだそれは、おぬしいつのまに、そんなものを……」

不思議に思われても仕方がない、後で追求されるだろうがこの際だ。それに私自身が不自然に感じているのだ、なにをいっても嘘しかでてこない。

だが、この銃の重量感、存在感は虚構などではない。

私は親方に耳をふさぐ様に声を張り上げる、一瞬ののち親方が耳をふさぐのを確認して、構えた B a u r を三点射する。

狙うのはもちろん敵の顔面だ。

一発目は胸に、二発目は首に、三発目は頭へと付きささる。

オーガは一瞬ふらつくが、倒れはしなかった。

「っち、骨か！」

頭に当たった時は相手が倒れる姿が頭をよぎったが、オーガは着弾点から血を流しながらも勢いを留めずに、むしろ加速して突進してくる。

それをローリングの要領で右へと避ける、親方の事が頭をよぎるが、親方は親方でうまく避けたようだ。

そしてオーガも親方ではなく、私へとその視線を向け、強烈な殺意をぶつけてくる、傷をつけられたのがよほど立腹なのだろう。

ならば、お腹いっぱいです、ごめんなさいと鳴いて叫ぶまで鉛の玉

をご馳走しようではないか。

相手の的がデカイのを幸いに私はBaurをフルオートで連射する。分間600発という発射速度を誇る大口徑ライフルである、もちろんマガジンは20発なので実際はものの2秒で撃ちつくしてしまうのだが、その威力は馬鹿にならない。

兵士が着込む、ナノ高分子素材製のボディアーマーの衝撃吸収力を3発で無効化し、心停止を引き起こす強烈な衝撃を与えるだけでなく、至近距離に置いてはボディアーマーを貫通し、致命傷を与え、また特殊な対人アーマー弾等により、100mの距離からでも14mm厚の鉄板をやすやすと貫通する。

それを20発ぶち込まれるのである、これで生きているのならばまさに化け物である。

だが、オーガはまさにその化け物であった。

「グオオオオオオオオオ」

オーガーが全身の筋肉に力を入れるとその圧力によって、突き刺さった銃弾が外へと弾き飛ばされる。

「なんてやつだ、筋肉で銃弾を受け止めやがった」
寒気がするようなタフさである。

だが確実にダメージは通っている、それに顔面だ、最初にあてた顔面への射撃。その弾丸は外へと飛び出してはこなかった。

だが筋肉がないとはいえ、銃弾をとめる頭骨だ、だがそれでも人型であるのならば、ウィークポイントも同じであると信じて、狙いをつける。

すでにマガジンは手早く交換済みだ。

だが、オーガーもそう簡単には撃たせてはくれない、大きく手を広げながらものすごい勢いで再度の突進を掛けてきた。
チャンスは一度だ。

私は、全身の神経と忍耐をその一瞬のみつぎ込んだ。

オーガが私目掛けて腕をふるう。
いま！

振るわれた腕をギリギリで避ける、そして運動エネルギーを消費して一瞬停止した腕へと跳躍する。

あとはその太い腕を奴の肩目掛け賭けのぼる。

「これで終わりだ！」

高さを取った、ここからなら頭だけに銃弾をぶち込める。

着地のことなど考えもせずに、空中でBaruを連射する、長年の経験がりコイルを最適な強さで調整し、弾は吸い込まれるようにオーガの頭部へ着弾する。

一発、二発、三発、四発！

ゴリッつという鈍い音と共に銃弾が骨を砕き脳へと達する、さしものオーガも脳を破壊されては動く事は出来ない。

崩れ落ちるように倒れると、ぴくっぴくっと痙攣したのちに動きを止めた。

叩きつけられるように地面へと降りる私。

さすがにアーマーなしであの高さから落ちればただではすまなかったようだ。

右足は完全に折れている。

だが、やつはしとめた、ならばきつと後は親方がうまくやるはずだ。私はそのまま意識を手放した。

目が覚める、意識が覚醒する。

またも眩しい光が顔に差し込んでいるようだ、手でそれを遮りながら目をあけた。

そこには泣きはらしたような目をしたリグリットが私の顔を覗き込んでいた。

「すまない、心配をかけたようだ。」

「そうよ…、いつときますけど私は怒ると怖いんですからね…」

そんな顔で言わないでくれ、罪悪感で押しつぶされそうだ。

「すまない」

だが、私の口からは謝罪しかでてこない。

気の利いた言葉の一つもいえないのだが、生憎と彼女の顔をみたらなんの言葉も思い浮かんでこなかった。

「いいこと、罰としてしばらくは外出禁止、ベッドからも出ちゃ駄目よ。そしてね、元気になったら私の料理をお腹いっぱい毎日食べるのよ」

「ああわかった、それは怖い罰だな。」

とりあえず私はまた命を拾う事ができたようだ。

すこしだが、事の顛末を聞く事が出来た。

なんでも私が魔法の道具を魔法で取り出し、オーガと死闘を繰り広げたということになっているらしい。

たしかに、一面では間違っではないなかったので、曖昧に肯定しておいた。

だがリグレットはあまり信じてはいないようだったが、とりあえずこの話を広めているのは親方であるらしい。

とりあえず魔法の道具ということになっているのならば、めずらしいもしくはそうかで済むらしい。

まあ親方には感謝しておこう、それに実際親方が半ば本気でそう信じている可能性もある。

あと俺が取り出した B a u r だが、俺が意識を失うと掻き消えるかのように消えたそうだ。

これは親方がリグレットだけに言付けてくれたことだ。

それとあのオーガだが、遙か遠くの山からはぐれてきた固体らしく、二つ隣の山付近で目撃情報があり、ギルドと呼ばれる組織が警戒を

行っていたようだが、その網の隙を突いて、こちらへとやってきたらしい。

えらくギルドの人が感謝しているそうで、討伐報酬を支払ってくれるそうだ。

私はこの様なので、全てリグレットが間に入ってくれたのだが、中々に彼女はこういった交渉とか対人関係を築くのがうまいようだ。報酬は通常の1・5倍だすという約束を取り付けてしまった。

もちろん私は全てをリグレットに渡すつもりなのだが、ある程度の資産にでもなるような額であると良いのだが。

Round 2 - 1

日の光を感じ目を覚ます。

もう慣れたものだ、数日前までは暖かい太陽の光を感じるだけで違和感を感じていたものだったが。

「ふむ…」

私はベッドから起き上がり立ち上がると、軽く腕や足を曲げて感覚を確かめてみる。

オーガとの戦闘で右足が折れてしまっていたが、それも村の神父のおかげで見事に良くなった。

魔法とはつくづく便利なものだ、魔法の中でも治癒魔法と呼ぶらしいが、それを習得した若い神父により私の傷はみるみると回復していった。

そして、普通ならひと月はかかるであろう傷が一回五分程度の治癒魔法数回でみごとに完治してしまった。

私の世界での最新鋭のナノ治療デバイスや再生医療技術に匹敵する治療速度である、私はそれだけで十分に驚嘆したのであるが、治療してくれた（いや、この場合は治癒魔法をかけてくれたか）神父に言わせれば

「わたしなどまだまだ未熟です。このように回数を分けて少しずつしか神の奇跡を体現することができません。わたしがもっと神の奇跡を強く施す事ができたなら、このような傷、立ちどころに癒してさしあげられたのですが…」

つまり熟練者が使えばそれこそたかだかの骨折など、まさに一瞬で治るということだろう。

まさに”魔法”である。

私はもはや、何を聞いても驚くまいとは思っていたが、そうそうにその信念を撤回するところであった。

もちろん疑問に思ったこともある、医者は居ないのか、ということだ。

そんなときは、困った時のリグレット様だ。

私の質問に嫌な顔せず丁寧に答えてくれた。

なんでも、この世界では病気になったら医者へ、怪我をしたら神父へ、と駆け込むのが常識であるらしい。

簡単に言えばである、病気は（ものにもよるだろうが）治癒魔法では治らないのだとか、そのためこの世界の医者はおっぱら内科医や歯科医、眼科医などであるらしい。

表現は私が勝手に翻訳した。

まあ考えるに、治癒魔法とは生物に対して作用する効果があるようだ、この及ぼす作用なのだが、人体の免疫や細胞再生を著しく促進する物ではないかと数度の治癒魔法の体験で私は推測した。

私は知識として風邪や流行病がウイルスや病原菌によって引き起こされていることを知っているが、この世界ではまだそのような考えは、無いとは断定できないが、少数ではあるだろう。

そういったことを知らずに魔法を掛けるものだから、症状の大元であるウイルスを体内にあるからと一緒に魔法を掛けてしまい、免疫力も上がるがウイルスも活性化し、相対的にはなんの変化もない、という状況が生まれているのではないか、作用の仕方にもよるが下手をしたらウイルスの背中を押してやっているだけなどという事にもなっているかもしれない。

免疫機構にだけ魔法を掛けるという芸当ができるものがあるのなら実験してみたい事ではある。

あー、それとだが、伐採の日雇いは私が倒れている間に首になってしまった。

とはいっても、オヤカタには大変に感謝されたし、一日だけだったが報酬も大分奮発してくれた。

まあ動ける様になったところには必要数の丸太を切り終えてしまっていて、もともと臨時だった私の仕事はなくなっていた、というのが

本当なのだが。

しばらく考え事をしながらストレッチをしていた私だったが、そろそろよい時間である。

気持ちよく洗濯された衣類に着替えると、リグレットが朝食を用意してくれているであろうダイニングへと向かう。

扉を開けてすぐ、リグレットが私に気づいた。

「おはよう、やっぱりいつもどおりの時間なのね。」

「ああ職業柄な…時間には厳しかったのでな、おはよう。」

いつものようにリグレットとの他愛もない挨拶を交わすが、私にとつてはその一つ一つが新鮮であり、至福の時間だ。

私はそのまま食器棚へと向かうとリグレットと自分の分の食器を準備する、これが私の食事での仕事だ。

あとは食事ができるのをテーブルに座って待つだけである。

鼻歌まじりにリグレットが吸い物を温めている。

その姿を眺めながら、明るくもたおやかな朝靄に包まれた外を眺めるのだった。

食事が終わってしばらく、ほのぼのと会話をリグレットと会話をしている、彼女が思い出したように”あっ”と声をあげる。

「どうした？」

「ええとね、言うの忘れてたんだけど…。」

若干言いつらそうに身を揺するリグレット。

「どんな事を言われても問題無い」

実際驚きの連続で感覚は麻痺寸前、いやオーバーヒート気味だ。いまさら大抵の事では驚かない。

「あのね…」

だが、それでも言いづらそうにいい淀む彼女。

そんな彼女の様子をみて、ハタと思いつく。

「ふむ…。私がこの家に居続けるのは確かに迷惑であったな。すまん、すぐに出て行くので…」

「ち、ちがうの。そんなことない、迷惑なんかじゃないわ。だから出て行かないで！」

私は自分見たいなのが長々と居候を続けるのはやはり迷惑であったと、それをリグレットが言い出せずにいるのだろつと判断したのだが、全部を言い切る前に彼女に遮られてしまった。

その時の慌てたような彼女は、不謹慎かもしれないが普段とは違う様子がとてもキュートであった。

ともかくも、私はここにおいていいようだ、オーガとの後辺りから心の中で蠕わだかまっていた聞くに聞けずにいた事が解決した。

たとえ同じ村の中であっても、リグレットの側から離れるのは、無性に、なぜか、うまい言葉が見つからないが、嫌な感じがしたのである。

はて、この気持だが、ずっと昔、子供の頃にも一度感じた事があるような…。

そこまで考えてはつと現実に帰る、見ればリグレットはなぜか顔を赤くしてテーブルのなにもない一点を見つめている、時折ちらつちらつとこちらを探るように視線を動かしている。

「ああ、そのすごく助かる。正直君がいないと俺は（この世界で生きていくのは）だめそうだ。」

途中焦ってしまい、言おうとした事を一部飛ばしてしまったが、まあ意味は変わっていないだろう。

だが、リグレットはさらに顔を赤くすると完全にしたを向いてしまった。

何か変な事を言っただろうか？

後年になるが、友人にこの事を打ち明けた際に、この穆念慈が！女の敵め！と散々に罵られる事になる。

未だにどの辺りが女性の敵という判断に結びつくのか私には理解出来ていない。

その後しばらくそのような状況が続いたが、リグレットが急に席を立つとキツチンでコップに水を入れ豪快に飲み干し、何事もなかったように戻ってきて話をしはじめた。

「急に顔が赤らめたが、熱でもあるのでは？だいじょ…」

「なんでもない、なんでもないのよ。大丈夫。大丈夫だから忘れて！。それでね、話っているのはね…」

またも言い終わる前に遮られる。ふむ、だがそうだ、思い出したこともある、故郷の言葉だ。

女心と秋の空…であつたか、半ば季節の崩壊していた時代の私にとつてはどちらも理解しがたいものであるな。

まあ続けよう。

若干の動揺を引き継いだ彼女の話を要約するとだ。

ギルドがオーガの討伐報酬を支払いたいのだが、私がギルドに加入していないのが幾分向こうさんにとって好ましくないらしい、そこで一度ギルドの支部まで来て加入申請をして欲しいとのことだ。

なんだ、そんなことかと私は私は肩透かしをくらった気分だったが、リグレットは付け足すように話を続けた。

「でね、そのギルドの支部なんだけど、この村にはないの。一番近

いのが隣町で…、歩きだと6日ぐらいかかるわ、馬車なら3日だけだ…」

私はリグレットが何を言いつらそうにしていたかを理解した、つまり私が隣町まで行って帰ってこれるかが心配であったのだろう、子供のお使い…とまでは言わないが、さすがにその程度でこれほど心配されても困るというものだ。

「要は私が隣町に出向けば済む話であろう？ ちょっと行って帰ってくるだけだ、すぐにでも準備しよう」

明るく言ったつもりだったが、それでもなお彼女の顔は暗いままだ。そんな彼女を見て、もう少し心配せぬよう言葉をかけようとするが、彼女の方が先に口を開いてしまった。

「…ちゃんと帰ってくるよね？」

そう言った彼女の姿はなぜかとても儚げに見え、言葉もどこか絶るような響きを含んでいた。

私はなぜかその時の彼女が、年若く危うげな少女の様に見えた。だから、そうだ。そんな彼女の心配を拭うため、私は殊更陽気に、自分でも驚くほど明るくいったのだ。

「当たり前だ、だから帰りを待っていてくれ。君の料理が食べられなくなるのは死ぬよりも辛い」

「……はい。料理たくさん作ってますから、まってますからね！」

「ああ、頼んだ」

Round 2 - 2

その後は私も彼女も何処か責恥ずかしげに、旅の準備を行った。

幸い朝ははやかったし、準備といっても地図と水に携帯食料、あとは衣類。

それにプラスして用心の為の武装といったところか、さすがに武器はリグレットの家には置いてないだろうと思っていたら、倉庫と成っている一室から一振りの剣を引っ張り出してきたのには驚いた。長く放置されていたのだろう、手入れはされていなかったが、その作りも意匠も実用性重視の立派なものだった、私の世界ではロングソードとも呼べば良い形であろうか、見た目はシンプルであったが、この剣は意外と名のつく鍛冶師が作成したのではないだろうか、そう思わせる”ナニカ”がにじみ出ているきがした。

それと旅装なのだが、リグレットが保管してくれていたボディアイマーのアイマー部分をとっぱらった部分を着ることにした。

というのも、アイマーは着脱できるセパレート式であって、さらにアイマーの下に対弾性、対刃性の高いボディスーツを別に着込んでいるのだ、そしてこのスーツ部分もセパレート式と重ね着式になっており、外側の保温機能も兼ねている外套部を脱げば十分に温暖なこの気候でも着こなせるだろう。

むしろ内側に着ている部分は通気性にすぐれている上に、速乾性、消臭性、さらに汚れづらいと三拍子そろっており、この世界のどの服装よりも動きやすいのではないだろうか。

ちなみにカラーリングだが、戦場が雪で覆われている事が多かったため全体的に白い色だが、アイマー部は黒であるし、ヘルメットも黒と、どちらかと言えば誤射を恐れての味方視認性を優先している感がある。

銃器にFCS（火器管制装置）が搭載され、その御陰でIFF（敵

味方識別装置）が歩兵にまで装備される時代であっても、誤射の数は減りこそすれ無くなりはいなかったのだ。

さて、そんなこんなで準備を終えるまでに2時間程かかっただろうか。

だが、昼まで時間はまだ余裕をもってあるし、なによりも私は早く行って用事を済ませてしまいたかった。

だからすこし無理をしても今日のうちに出発するとリグレットに伝え、準備を手伝ってもらったのだ。

私も一度見たことがあるので知っていたが、隣町とを定期的に結ぶ馬車があるのだが、生憎とその馬車は数日前に出発してしまった、ひと月に2回ほどしか往復しないので、次は当分先になってしまいう歩くしかないのである。

「おう、我らが英雄のお通りじゃな。ハハハ」

村の出口までリグレットと連れ添って歩いていると、親方と遭遇した。

今日は伐採にはいかなかったらしい、すでに酒が入っているのか、じゃっかん顔が赤い。

「なんじやいその格好。ふむ、アグリライまでいくんか？」

ああ、言っていなかったな。

アグリライというのが、隣町の名前だ。なかなか賑やかであるらしい。

「ええ、ちょっとギルドまで用事をすませに、すぐ戻ってきますよ」

「そうかい、まあオーガとやりあえる魔法使いさんだ、ちょっと隣町までぐらいなんでもないな。まあついでアグリアイの女は別嬪ぞろいだからな、羽も一緒に伸ばしてきたらどうだ。ワハハハ」

そついうと、親方は大きな手ばしと私の背を叩いて唐突に去っていく。

「まったく、親方つてば……。すぐに帰ってくる約束忘れないでよね」
「ああもちろんだとも」

急に機嫌を損ねたリグレットの言葉を聞きながらも、幾分か隣町に對する興味が湧いてきた。

もちろんそういった綺麗な女性に興味がわいたのではない、だが、この世界の事について私はまだまだ知らないことが多すぎる、時間の許す限りは見聞を広めておいても損にはなるまい。

むしろ、広めて置いた方がいざという時の為になるだろう。

よし、そう意識する。

ならばあとは行動するだけである。

都合よく村の端辺りへとたどり着いていたので、リグレットにここまででいいと伝え、「行ってくる」と短く喋るとそのまま村を出てきた。

すこし強引なぐらいでないとリグレットが何時までもついてきそうだったのだ。

どこまでも続く青い空を見やりつつ、草木が踏みつけられ、”まあ道だろう”と分かる程度の林道を一步一步確実に踏みつけ歩き出した。

ああ、そうであった。

もしかしたら話の流れで、ならばリグレットも連れていけばいいで

はないかと思っただ方が居るかも知れない。

だが、彼女はこの村から出ることに強い躊躇いを持っているようだった。

だから私も無理強いはしなかったし、彼女も強い葛藤を覚えたようだったが、結局は短い時間で結論がでなかったのだろう。

この妥協案に落ち着いた。

その辺りのやりとりもまた別の話、いやこの先……。

ともかくも今語るの止そう、いづれ語るべき時がくる。

先人達の残した道標のお影で私は迷うことなく道筋の半分ほどを消化してしまった。

予定では3日目の工程の半ばの筈だが、実際は二日しか立っていなかった。

伊達に軍隊で訓練していたわけではないのだ。

私は日が暮れる少し前に地図に記された水場へと到着することができたので、そこを二日目の野营地と定め、小枝を集めて火の準備を始めることにした。

さすがに魔石道具も着火ライターほどのサイズまで小型の物は流通していなかった、火打ち石という原始的な道具と着火剤替わりのオイルランプで火を起す。

軍隊のサバイバル訓練でナイフだけで火を起すなどという訓練を、

当時は盛大に馬鹿にしていた私だったが、いまはただカリキュラムに盛り込んでくれた教官に感謝したい。

もちろん火打ち石はリグレットが貸してくれた物だ、とはいってもこれも倉庫に眠っていた代物だが。

リグレットは魔法が使えるし、魔石道具もある。

火打石など使うことがないのだそうだ。

むう…、このときばかりはうらやましい。

そして、簡単な携帯食を食べ終わると、私は徐にボディーマーに付属のヘルメットを携行リュックより取り外す。

カブリもせずに、かさばるコイツを運んできたのにはもちろん訳がある。

オーガとやりあった時におきた、あの謎の現象の事だ。

事が事だけにリグレットに相談するわけにも行かずに、今まで放置していたが、この一人になれる機会にある程度調べてみようと思っているのだ。

もちろんあれ以来、あのような現象は起きていないので、あの時だけの再現性の無いモノなのかもしれない、まあなにかやっていたらわかるだろう。

とりあえず表示されたのが、このヘルメットに搭載されているHM
ディスプレイ
Dと同じ表示だったので、とりあえずこいつをかぶってみることにする。

そのまえに、外部から軽くチェックをする。

バッテリーは生きている、回路にも不具合があるようには見受けられない。

「…まあなにか起きてても死にはせんよな」

一抹の不安を覚えつつも、それを振り切るように勢い良くかぶる。

とたん感じるのは、とても懐かしい感触だ。

戦場にあつて、このヘルメットはなくてはならないものだった。だが、いま感じるのは懐かしさだけだ、戦場に立っていたのが嘘の様に昔の事に感じる。

「まったく、私も存外薄情な男なのだな」

あの戦場を共に駆け抜け倒れていった戦友たちに申し訳なく思う反面、彼らに対して面白い土産話を聞かせてやろうとも思うようになつていた。

私はカバーで保護されていた電源スイッチを押し込む。

ある程度のタイムラグを置いて、ちょうど目の前に位置していた薄型の透過型スクリーンに人工の光がともった。

H M D s y s t e m o n l i n e
s y s t e m a l l g r e e n
N e t b a t r u n n i n g
S a t e l l i t e L i n k d i s c o n n e c t
I n f o r m a t i o n o n s c r e e n

「ふむ…」

異常はない、そしてあの時はあつた”兵科”などという見慣れない項目もない。

「まったくもつて、いつも通りだ」

ために無駄だと分かりつつ、S O S 信号を発信したり、G P S 観測なども行つて見たが、見事に反応がない、G P S からの信号が検出できない。

ならばあれは、あのときだけ起きた神の奇跡だともいひのだろうか…。

まあ、時間はたくさんある、思いつくことはすべてやってみるとしよう。

・ ・ ・ ・ ・

「ふむ……」

考えては思いついた事を実行する行動を初めて2時間程がたっただろうか。

こうまでなんも反応もないと、さすがに私もあれは奇跡が起きたで済ませてしまっただけいいような気さえしてきた。

「まったく、使えるのか使えないのかぐらいははっきりさせてほしいものだ、まあそれも贅沢と言うものか」

さすがにつかれてきたのでヘルメットを脱いで眠ることにする。

肩を鳴らしながら軽量と歌われつつも、兵士にはくそ重いと評判のヘルメットを脱いで固まった。

抜いだのに、ヘルメットを脱いだはずなのに、目の前にはまだHMDの画面があるのだ。

「……俺の時間を返せ」

その後ヘルメットをつけたり、抜いだりしてわかったことだが、この謎のHMD画面（めんどいので擬似HMDと呼ぶ）は、透過型のスクリーン越しには映らないのだ、正確に言えば、本来のHMDを起動した状態だと映らなくなるのだ。

なんじゃそりや…と言いたくなる仕様だが、そうだというのなら受け入れるしか無い。

ちなみに、ヘルメットを抜いで確かめたのだが、音声で”接続”及び”起動”に類する内容の単語と、表示しろ、という意識をもって発言すると出現するようだ。

消したい時は右上にある”×”マークか、同様に”切断”か”終了”の内容を言えばいい。

ちなみに、本来のHMDにはこんなボタンマークは存在しない。

その後もいろいろといじくり回した結果わかった事だが、”兵科”と呼ばれる項目にはEU軍とPAC軍で採用されていた兵装が表示されるようだ。

そして確かに、”偵察兵”、”突撃兵”、”工兵”、”援護兵”、の4兵科はPAC軍、EU軍に置いて、戦争終盤に置いては半ばあつて無いようなものであったが、一般的な装備兵装による標準的な兵科分け基準にそつたものだった。

これらもあの時の”Baur”と同じように、操作をすればこの世界に出現するのであろうか…。

しかし、珍妙なのはである、PAC軍兵士である私のHMDに、なぜか敵のEU軍の装備が選択候補として上がっている、これはまあいい、たしかに変ではあるが、武器がいきなり現れる事の前に比べたらささいなことだ。

私が言っているのはだ、表示されている兵装の大半が薄暗く表示されており、一部の兵装のみが明るくライトアップされていることだ。例えばであるが突撃兵ならば、”Baur”や、PAC軍の歩兵用標準ライフル”Krylov FA-37”（クルイロフ FA-37）、そしてEU軍の標準ライフル”SCAR 11”（スカイレブン）などだ。

実際恐る恐ると、画面上部、何も持っていない人形シルエットへとアイコンをドラッグさせてみたが、なんの問題もなさそうに、一瞬の瞬きの後に、手のひらへと現れた。

ものは試しにEU軍のSCAR11を試し打ちしてみるが、PACのKrylovとは又違う独特の発射反動リコイルを感じた。

これはこれで面白そうな銃である。

そのあと出現した銃の始末に困りもしたが、HMDの画面でシルエットから外せば、2分ほどのタイムラグを置いて消失することがわかった。

そしてなんとだが、再度出現させた際にはマガジンがフルチャージされた状態で出てくるのだ。

いったいどんな仕組みなのであろうか…。

退屈はしないで済みそうなのがせめてもの救いであろうか。

ああ銃をぶっぱなしてスッキリした後で気づいたのだが、画面左端に、残アンロック数という表示がでていることを発見した。

これはひよつとして…と思った私はとりあえず援護兵のタブメニューより、Clark15Bという薄く暗く表示されているショットガンにポインタカーソルを合わせ、意を決しクリックする。

とたん、無機質なシステムメッセージウインドウが開き、”アンロックしますか？”そして”はい/いいえ”の二択が表示される。

「びんごだ」

とりあえずは確認だ、私は”はい”を選択する。

そのままウインドウは何事もなく閉じてしまったが、Clarkを表示していたアイコンが薄暗いものから明るいものへと変化していた。

私はゆつくりとそのアイコンを上部のシルハットへとドラッグした。あとはもう、想像の道理であり、見事にClarkは実体となって現れた。

そしてその後もトライ&エラーを重ねること30分、私はこのシステムの大まかな要点を押さえることができた。

簡単に言えばである、このメニューを使ってアンロックというポイントをつかい、使える兵装を増やすことができる画面であると同時に、兵装を実際に出現させる操作を行うメニューでもあったのだ。ちなみに、武装だけでなく、各種のサブ兵装、補助装備も選択欄にはあり、それらの組み合わせを保存しておき、いざ戦闘となったら操作一つですべて出現させるなんて操作も可能であった。もちろん、いくつかの制約がつくのであるが…。

そして私が持っていたアンロックポイントは15あった、クラークに使った分を含めてだ。

私はまず、アビリティという端の方に表示されていた項目に目をつける、そこにはPAC軍でもはや常備品と言っているほどに重宝されている薬の名前を発見した。

"Sprintcor 20 Enhanced Endurance"

"Staminnar 9 Recovery System"

の二つである。

薬物と聞くとアレな感じがするのだが、最新のナノマシン医療技術が応用されたこれらは副作用なしで、長時間作用し、二つで兵士のダッシュ力とスタミナ回復力を数段階底上げしてくれるのだ、こいつらなくしては私は戦場で生きてはこれなかっただろう。

私はなんの躊躇いもなくその二つをアンロックする。

そしてうれしいことだが、こいつらに関してはアンロックしただけで効果があるようなのだ。

アンロックした途端から体が軽くなった。

あとの事は長くなるのですこし省くが、私は基本を守ることにして、偵察兵、突撃兵、工兵、援護兵それぞれの基本装備をメニューに記

憶させ、次回から一発でロードができるようにした。

また、予備として、カスタムという欄にもあらかじめ設定を保存させておく。

アンロックポイントも相当数消費してしまったが、この際はしかたがない。

工兵の主兵装たる対車両用携行大口径砲”P i l u m H - A V R”などは、またオーガの様な奴とであった際に是非ともあつて欲しい火力だからだ。

ちなみにアーマーの設定もあり、P A C 軍ではボディアーマーを二種類用意している、”ヘヴィアーマー”、”ライトアーマー”とあるのだが、それらを選択したあとに一瞬にして体に装着されるのは、なんというか、本当に、気持ち悪い。

とりあえずは出発前にきたインナースーツだけで十分だろうと、アーマーは敢えて装備しないことにする。

とりあえずいつでも出現させられると言うことは繰返の動作でわかったので、主兵装はとりあえずしまったまま

（私は出現させていない状態のことを、”しまう”と表現することにした）

使い慣れないロングソードだけでは怖いので、E U 軍の大口径リボルバー”P 3 3 P e r e i r a”をガンホルスターで太ももへと固定し、B J - 2 コンバットナイフと呼ばれる軍用の特殊鋼製ナイフを同じく腰に吊るす。

そして、数個の時限式グレネードボムをプラスチック製の汎用ウエストポーチへと入れる。

ポーチはなにげにポイントを消費せずに選択することができた、地味に嬉しかった気配りだ。

とりあえずはこれでなんとかしよう、なんとかなるだろう。

そう考えると、燃え盛る焚き火に、リグレットに教わったとりに、キツイ匂いのする袋を一つ投げ入れる。

中に入っている香草の匂いを魔物はひどく嫌うらしく（私も好きに慣れないが）、寝る前に炊くようにと渡された。

事実一泊目の野営でも、これのお影がどうかはしらないが、動物の一匹も近寄ってこなかったので、まあ効果はあるのだろう。そんな事を考えつつ、私は横になった。

天頂、空には星座群が神々しく輝いており、世界の広さを否応にも意識せざるをえなかった。

意識が落ちる直前だったが、流れ落ちる箒星を目にしたような、しなかったような…。

Round 2 - 2 (後書き)

続きません。

そう思っておいた方が精神衛生上よろしく思います。

Round 2 - 3

突然だが、私は今ピンチに陥っている。

擬似HMDを弄り回した昨夜から一夜明け、私が目を覚ますとだ。

起き上がった私は、ゼリー状の体をした魔物達に取り囲まれていた！
何を言っているか自分でもよくわかってはいない。

「ぷにぷに…」

時たまぷにぷにと言っている、いや、言っているでいいのだろうか。
大きさとしては結構でかい、体積で言うなら人間の5歳児よりも大きい。

その上だ、どういった原理か、目にしか見えない縦長の黒い瞳と、
口にしか思えない位置にある赤い口。

すまない、言っている事がめちゃくちゃだが、私のその時の混乱具合を読み取って欲しい。

それらがざつと30匹はいるだろうか、何時の間に近づかれたのか
まったく気がつかなかった。

そして何よりもだ、そいつらの姿と時折思い出したようにぷにぷに
言っている行動が、愛くるしすぎてたまらない。

一匹ぐらい持っても大丈夫じゃなかるうか…。

近くの一匹に狙いを定めると、ふらふらと近づき、相手に逃げる隙
を与えないように電光石火の如く手を伸ばし一匹を捕獲する。

「ぷ？！ぷにに！！」

じたばたともかくが大して力強くは無かった、手で押さえながらそ
いつの顔をジーツと覗き込む。

周りに居た奴らが一斉にずざざと、5m近く後退した。

目と口しかない奴らだが、その顔はどことなく恐怖で引き攣っている様にみえなくもない。

私は面白くなって来て、捕まえている奴に向けてニヤーっと旧世紀の映画で見た悪役の様な顔をしてやる。

「ぶ、ぶにいいいい!!」

途端、捕まえていた奴が物凄い絶叫を上げたかと思うと、物凄い力で私の拘束を振りほどき林の方へと駆け出して行ってしまう。

取り囲んでいた他のゼリーたちも釣られたように右往左往しながら、それぞれが点でバラバラに逃げ散っていった。

「遊びすぎたか…、しかし一体なんだったんだ」

それに、あんな大群の接近に気付かなかったとは少し弛んでいるようだ。

まああんなゼリー見たいのがいるなんて想像すらしていなかったのだ、その点で言えばしかたないと多少自分で慰める。

あいつら逃げる時もぽいんぽいんと跳ねる様に高速で、さらにほぼ無音で逃げていったのだ。

どう気付けというのだ。

「さて、起きてしまったしな。飯でもくって歩き始めるか…」

私はなんとなしに呟くと、食事の準備に取り掛かり始めた。

そこからの道程は、まさに順調。

なんの事故や魔物との遭遇もなく進んでいった。

特にアンロックした二つの増強剤の影響で、驚異的なハイペースを実現している。

平均的な旅人が6日かかる道を僅か4日で走破してしまった、もつとも最後は日が沈んでしまい、街の門が閉じていたので、街に入れたのは5日目であるが。

そうだ、それと途中でだが、新たにアンロックポイントを消費して、最新鋭のナノテクとハイポリマー製の最新の軍用の行軍靴SAB-

1bを取得した。

私が履いていた、標準支給の靴でも悪くはなかったのだが、以前に戦友が新しい靴について、”やばいぐらい使い安い”と言っていたのを思い出したので、そいつを信じてアンロックしたのだ。結果としては信じて良かった。

羽の様に軽い上にしつかりと足首を保護してくれ、さらに衝撃を緩和してくれるので、多少の段差の飛び降り程度では衝撃すら感じない。

これのお影で大分持久力の持ちがよくなった気がする。

ともかくも、やっとアグリライについたわけだ。

外から街を眺めたのだが、街は想像以上に大きいようだ。

街の周囲は石で組まれた大きな城壁で囲まれ、数力所に設置された城門には兵士が常駐しているようだ。

さすがにその外観は壮観の一言につきる。

すこし物々しすぎる気もしたが、魔物などがいるこの世界だ、用心しすぎるて困ることは無いのだろう。

私は夜遅くに街へと付いたので門が閉まっていたのだが、城壁の上で見張りに立っていた兵士がいい奴で助かった。

私に気づいたそいつが、ぐると壁伝いに回った隣の門の前に、閉門時間に間に合わなかった人間が集まる野営地が出来ていると教えてくれた。

私は礼を言つと、そちらに向かって歩き出す。

意外にも閉め出されてしまった人達というのは結構いるらしく、そこそこの規模の集まりになっていた。

よく見ると城壁の上に立っている兵士の数が先程の処よりは多い。

それに、よく見れな野営地の端にも武装した兵士の姿が見える。

ふむ。街の運営者も、門を時間で閉める決まりは厳守したいが、かといって守れなかった者に何もしないというのもできないというこ

とか。

まあ難しい処ではあるだろう。

だが、私が考えることでもないか…。

そんなことを考えながら寝る場所を探してふらふらしていると、急に後ろから袖をひかれた。

みれば年若い少年がしっかりと私の袖を握っていた。

「おじさん今ついたのかい？ だいぶ遅い到着だね、一人なの？ 疲れてるだろ、どうだい上等とは言わないがベッドを用意できるぜ、街中にある名門宿”ウィルコット”の特別支店だ、安全も保障するぜ」その少年は私が振り向くなり、まくし立てるように喋りかけてくる。客引きか、戦場じゃとんとご無沙汰だったな。

「悪いな、遠慮しておこう」

ベッドと言われてもいまさら一泊夜営が増える程度苦でもない。

それに貨幣もいくらかりグレットに貸してもらったが、あまり使いたくはない。

少年には悪いが私はそれを断って、また寝る場所を探し始める。

だが、少年の方はまだ諦めていなかったようで、今度は私の前へと割り込んでくると、私の歩きに合わせて動きながら尚も話しかけてきた。

「まあまあそういわないでよ、いまならさ格安にしておくからさ、それに俺この街のことならよくしってたんだ、名所とかうまい店とかさ、泊まってくればもれなく教えちゃうぜ…、ってちょっとまってくれよ！」

私は尚も無視して歩き続ける。

いくつか用意されている篝火のひとつに目をつけた、その近くで横になろうと足を速める。

くつついてきている少年もさすがにそろそろ諦める頃だろう。

そう思っていたのだが…。

まさか、最後までくつついて来るとは思わなかったよ。

「へへ、残念だったねおじさん。俺はこれって見定めたお客さんは逃したことがないのが自慢なんだぜ。」

「はあ…、それは君のしつこさに負けただけだろう」

「いいんだよ、お客さんになってくれれば俺にはさ。ただの雇われだしね」

どこかで妥協しなければこの少年はずっと張り付いて離れない気がしてくる。

まったくやかいいなのにつかまってしまったようだ。

だが、まあ子どもが元気なのは良いことだ。

私が戦っていた理由だって、少しでも多くの作物が実る土地を確保することであり、その多くは成長期である子供に優先的に供給されていたはずなのだ。

まあ私の少年時代は空腹感しか感じなかったがな。

「ちょっと聞いてんのおじさん？」

「まったく君のしつこさには負けるよ。ただおじさんってのはやめてくれ、これでもまだ30にはなっていないんだ」

「20超えたらみんなおじさんだよ、それよりさ、とりあえず客になつてくれよ。うち簡単な食事を出してるんだ、食事だけでいいからさ」

「わかった負けたよ、食事を頼む。」

「へへ、話をわかつてくれてうれしいぜおじさん。食事は俺がすぐ運んでくるからさ、前払いで銅貨15枚たのむぜ」

私はしかたないなとばかりに上着の内ポケットから銅貨を取り出して渡してやる。

「さんきゅー。まあまっつてくれよな」

相場の感覚がない私にとって15枚が高いのか安いのかはわからなかったが、意外にも料理は暖かくそこその量と味であった。

あとは荷物を体の側に寄せ眠りに付いた、あのなぞのゼリーには遅れを撮ったが人間相手ならば気配で飛び起きる自信がある。

それに兵士が夜通しでたっつてくれている、治安は良さそうだな。そう思いながら意識が落ちた。

翌日、周りが起き出したのを感じ、それに合わせて私も起きた。うつすらと明るい光、まだ太陽は顔を出していない時間である。

だが気付けば、ちらほらと城門の前にはもう列ができています。そろそろ開門の時間なのだろう、一人だけヘルメットの意匠が違う部隊長であろうか、その彼がちらちらと掲げ持った時計をみている。ああ、もちろん動力は魔石だ。

ちなみに小型の物は高価である、彼の私有物でなく部隊の備品だろう。

リグレットの家にも若干安価な据え置き型の物が置いてあった。時間の表記も私の世界と同じ24時間で、私も驚いたものだ。

まあ言葉が通じている時点でおかしいのだから。

そうだな、扉がひらくまでその辺りの話をしようか。

まず、言葉なのだが、私は自分で故郷の言葉をしゃべっているつもりだ。

だが、リグレットに言わせれば流暢に彼女らの言葉をしゃべっているように聞こえるようだ。

もちろん、遠まわしに聞いたただだから、本当に言葉が一緒の可能性もあるが。

だが、文字が違う時点でそれはないだろう。

その文字もだが、すこし眺めているとなんとなくだが読めるようになるのだ。

まさに不自然、だがまあ言葉の勉強をせずにすむのならそれに越したことはないのだから文句も言えないが、それでもなんとなく気持ちが悪い。

私が聞いている言葉も故郷の言葉に聞こえる。

だが、いつだったか気づいたのだが、集中しながら聞くと、彼らが本来しゃべっている言葉が二重に重なって聞こえることを発見した。なんとなく文字を見て、文法を聞くに、英語に近いのだろうか。

軍事学校で中国語、ロシア語、英語と叩き込まれたというか、片言でも覚えなければ仲間とのコミュニケーションすら取れなかったので必死に覚えた経験がある、なんとかなるだろう。

まあそれも時間ができたらの話だが。

ちようどよく時間が潰れたようだ。

兵士が慌ただしく動き始めた。

「時間だ、開門ー！開門するぞー！」
兵士の一人が叫んでいる。

それと同時に徐々に、大きな扉が観音開きに開いていく。

完全に開ききった処で、留め金でしっかりと固定されていた。

あとは、街に入るだけだ。

入り口では、兵士数人が検問を行っているが、私にはギルドからの

紹介状もあるし、特に問題にはならないだろう。

実際問題は特になかったのだが、その紙を兵士に見せるなり、検問を行っていた兵士が全員敬礼付きでお通りくださいと見送ってくれた。

問題と言えば問題か、部下を持っていた手前、慣れてはいたが、他の軍の兵士に敬礼される理由があつただろうか。

手紙の内容も、特に変ではなかったはずだ。

紹介状というか、オーガの死体を確認したギルドの人間が書いた報酬支払い確約書が中身だ。

「ふむ…」

まあ気にしないことにしよう。

時間もまだ早い、外にも臨時の宿が出ていたぐらいだ、朝からやっている宿もあるかもしれない。

とりあえずは宿を探そうとして、また袖をひっぱられる感触を感じる。

なんとなくデジャビュを感じながら振り返ると、案の定。

「へへ、おじさん。宿さがしてないかい？ 街中の本店はこの時間から部屋借りれるぜ、ついでに言えば水場も使えるぜ」

まったく、かなわんな。

「頼もう」

「まいど！」

「じゃあ、こっちだついてきてくれよ」

そういうと大道りから少し外れた、それでも大きめの道に面した宿へと連れてこられた。

扉を開けると、なかなかこざっぱりした作りの、酒場と食事場を兼

ねた作りの一階が目に入ってくる。

「マスター！お客さん連れてきたぜ。」

「おう、ぼうず助かるぜ。」

カウンターの奥でなにか作業をしていた大柄な男性が出てくる。

「ははは、お客さんも昨日は閉め出されちまった口ですな、今から明日の朝までで銅貨300舞か銀貨3枚だ、どうします？」

高くとも判断する基準がない、ここは黙って払っておこう。

「頼もう、ところで食事はつくのかな？」

「まいど、勿論だ。量だけは用意するからまあ楽しみにしといてくれ、ほれぼうず案内してやんな」

そういうと、カウンターから鍵を取り出し私に渡してくる。

私も銀貨を3枚取り出して、店主へと渡した。

「じゃあごゆっくりどうぞ、飯は昼も出す、外には井戸もある。自由に使ってくれ」

そういうと奥で作業に戻ってしまった。

「ほら、おじさんこっちだぜ。」

「あ、ああ」

私を通されたのは二階の一番奥の部屋だった。

そこそこに綺麗で広さも私には十分だ。

「じゃあ、俺はまたお客をひっぱってこなきゃいけないからよ、これでいくぜ」

そういうと少年が立ち去ろうとしたので、呼び止める。

「助かった、受け取って置け」

チップと言う奴だ、まあ銅貨数枚ならリグレットにも怒られまい。

「へへ、わかってんじゃねーか。まあ聞きたいことがあったら昼ごろ下で飯くってるから声かけてくんな。」

そう言っただけで走りだそうとして、すぐにまたこちらに向き直る。

「名前いってなかったぜ、俺の名前はアッシュだ、おじさんは？」

「トーヤだ」

「変な名前だな、まあよろしくな！」

無邪気にそういうと、脱兎の如く走り去ってしまう。

その様子を私は微笑ましく見やっていた。

その後、とりあえず、旅装を解き、外の井戸で軽く体を洗う。

あとは部屋の窓から街を眺め始めた。

日が高くなるにつれて、じょじょに表を行き交う人の数が増えていく。

「噂に違わない盛況さだな……」

私の世界では見れない光景でもある、飽きることがないな本当にこの世界は。

Round 2 - 3 (後書き)

お詫び

リグレットの表記ですが、なぜか最初の自己紹介ではリグレット、そのごリグレッドと3種類も出現しておりました。リグレットで統一しました。すみません。

そして同様にHMDヘッドマウントディスプレイですが、HUDと表記しておりました。HUDだとヘッドアップディスプレイになってしまい別の物です。申しあげありませんでした。

続く！

Round 2 - 4

昼ごろ下へ降りていくとすでにアツシユは飯を食っている最中だった。

皿にのっているのはスパゲッティに似た料理だ、掛かっているソースや混ぜ込んでいる野菜は見たことも無い種類だが。

「よっ！おじさん。おじさんもいまから食事？」

こちらに気づいたアツシユが声を掛けてくる。

私はアツシユの隣に腰掛けながら

「ああ、さすがに腹が減る時間だ」

「ここは量だけはあるから期待していいぜ、まあ味は気にしたら負けだけだな、ははは…いてっ！」

いつの間にか料理をもってやって来ていたマスターと呼ばれた店主のゲンコツがアツシユの頭に落ちていた。

「そんなに言うなら、別に食わなくていいんだぜ、坊主」

「だ、だれも食べないなんて言ってないじゃないか！」

涙目になりながら弁解しているアツシユだったが、この二人こうは見えても仲が良いのだろう、店主の顔もどこか冗談めかしたものだ。

「はいよつと、お客さんの分だ。こいつの言うとおり味は普通だが量が売でね。お代わりもいつてくれれば作るから腹いっぱいしてくれ。」

「ああ・・・」

そうは言われてもだ、かなり大きい深皿の上にはパスタで山が出来ているのだ。

さすがにお代わりどころか、食いきれるかどうか…。

そこまで考えて、隣に座っているアツシユがどこか瞳を輝かせなが

らこつちをみているのに気づく。

「…少し食うか？」

「やっぱり話がわかるよ！おじさん！」

私が残した分はアツシュがしっかりと完食してくれた。
うぷっ…。

「えっ、ギルドの場所？分かるにきまつてんだろ」

その後しばらく私は動く事もできなかったのだが、ちなみにリグレットの大盛りなどとは次元が違った。

すこし腹が小慣れてきたので、アツシュにギルドの場所を訪ねてみたのだ。

「おじさん、やっぱり冒険者なのか！」

どこか瞳を輝かせながら身を乗り出す様に聞いてくるアツシュ。

憧れでもあるのだろっ、その期待を裏切るように少し悪い気がするが。

「いや、期待させたようだが冒険者ではないな。別の仕事の途中にたまたま魔物と遭遇してな、そいつを運良く倒せたので、ギルドが報酬を払ってくれるんだとさ」

「えー違うのかよ、体が引き締まってるし、あんな剣持ってるから冒険者だと思ってたのに…」

「ははは、すまん。剣は借り物だし、鍛えてるのは仕事柄さ」

嘘はいつてないと思う。

「ちえ、まあいいや、ギルドだけだな。まず右へ曲がって——」

「ふむ、つまり中央広場の竜と剣が書かれた看板の建物なのだ」

「そうだが、解なくなったら誰かに聞けば答えてくれるさ。ギルドの場所しらねーやつなんて、街の人間にはいねーからよ」

「わかった、たすかったよ」

「へへ、礼は夕食で返してくれよ」

まったく現金な奴だ、だがどこか憎めんな。

「わかった、まあとりあえずいつてくる」

「おう、俺も一稼ぎしてくるぜ、じゃあな」

そう言つてアッシュが外へ出て行こうとする直前、外から扉が開かれる。

さすがのアッシュもちよつと驚いたようだが、お客優先はわかつているようだ、身を引いて、扉を開けた客に道を譲ろうとして固まってしまう。

なぜなら、入ってきた客：客なのだろうか？

まあ、入ってきた人物が絶世の美少女だったからだ。

だが、リグレットとは違い、どこか冷たく、表情に固さを持った女性だ。

年は18か17か、少女とも女性とも言い難い年だ。

セミロングにカットされたなびくブロンドの髪が目を引きいた。

それに格好も凄い。

白い洗練された意匠の甲冑に、銀の刺繍が入った赤いマント、なんといったか、そう騎士だ。

数百年前にヨーロッパに居たと言う騎士^{リッター}の格好そのものである。

なんというかである、美少女と騎士甲冑、その一見奇天烈な組み合わせが非常によく調和している、アッシュなどは見事に固まったまま口を広げている。

さすがの店主も表に出てきて眉を潜めている。

つと、その騎士少女が誰かを探すように酒場内を見渡し…そして私
で止まる。

「トーヤというのは貴様か？」

彼女はかちやかちやと腰に吊るしている剣を鳴らしながら、近づい
てきた。

アッシュなどは、おじさんなにしたの！？、とてもいいたでな顔だ。
俺にだって心当たりなどはない。

「たしかにトーヤだが、騎士様に目をつけられるような事をやった
覚えはないんだが…」

だが、その少女はまったくこっちの話を聞いていないようだ。

私のすぐ側までくると、”そうか”、と言ったきり私の全身を上か
ら舐めるように観察しだしたのだ、私に視姦の趣味などない！

「ふむ、いいからだ」

急に顔を上げ、唐突にそんなことを口走る彼女。

だから俺にはそんな趣味は！

そんな私の内心など無視して彼女は言葉を続ける。

「お前…、私に仕える」

「…っは？」

アッシュと私の言葉が重なったのは仕方があるまい。

その後はあまり思い出したくない。

彼女が仕えると言えば、私がまて説明をしると返す。

そのごはそんな単語のキャッチボールである。

まあ最後は見かねた店主が取り持ってくれて、とりあえず話をまと
めることができた。

まとめるところだ、彼女は結構いいとこの貴族のお嬢様で、そのお

家は代々騎士の家系なのだそうだ。

多分に漏れず彼女も騎士になったが、優秀な副官というものを探していたらしい。

なんでも家訓の一つに副官は大事である、みたいなのがあったのか。

彼女も王都で探すつもりであつたらしいのだが、配属が国境近くのアグリライに決まってしまったので、しかたなくこちらへとやってきたらしい。

だがこちらの兵士は不甲斐ない奴ばかりなのだそうだ（彼女基準）。そんなところにオーガを一人で倒したという奴がやってきたという噂が流れたらしい（私のことだな）

噂元の門番に聞いただし（彼女流で）ここまでやってきたらしい。

ちなみに、彼女がオーガを倒したトーヤというのが貴様だろう、などと口走ってくれたお影でアッシュの瞳がさらに数倍輝きを増した気がするのには気のせいだと思っておこう。

そして、いま彼女は優雅に紅茶を飲んでいる。

私は胃がいたくなりそうなのである。

一般的に考えればこれはいい話なのだ、なんせ貴族に直接雇われるのだ。

彼女も高めの給金を提示している、はっきりいって高待遇だ。

だが私は今は軍隊で働く気はお気ないし、それにリグレットに帰ると約束してしまったのだ。

どうにか丸く円満に断らなければいけない。

ああもう、そうだ。

忘れそうになった、彼女の名前だが、ランドルネ・フォン・リッターマイヤーと言っらしい。

「あー、そのランドルネ様？ お申し出は嬉しいのですが、私にはすでに仕事がありまして…」
出来るだけ低姿勢でだ、権力者相手にはこれが大事だ。
我慢ができなくなったら戦場で晴らせばいいのだ、流れ弾が偶然、そのいやな上官にあたるなんて幸運がよく起きる。まあなぜか毎回弾が自軍の物なのだな。

「別にやめればよい、やめる際になんらかの不利益がでるのならそれも補填しよう」

いかん、条件がさらによくなった。

「それにオーガを倒したのも偶然なのだ、期待されているほど強くはないから他の方を探した方が…」

「問題ない、一人で立ち向かったという事実だけを取ってみても得難い資質だ」

…

「戦場にでるのはちょっと…」

「貴様それでも男か！鍛え直してやる！」

もうどうしろと（涙）

「私に支えればよいのだ、さあ決断せよ」

うぐ、こちらの思考を読むように。

この際はしかたがない、リグレットを引き合いにだそう。

「お世話になった女性に帰ると約束してあるのです、それに私もしばらくは一緒に暮らしたい」

「つむ…それは…」

断りきれたか…。

「わかった、ならば私が説得しよう。その女性の元へと連れて行くが良い」

どうしてそうなるの！

さすがに万事休すか、もしくは実力行使かと覚悟したとき、救いの女神は現れた。

「ランドルネ！あなたなにしてるのよ、まったく。あなたの家系の副官に対する執念を甘く見てたわ」

走ってきたのだろう、息を若干切らせながらも、しっかりと鍛えられた体はまだまだ余力を持っていそうだ。

新しく入ってきた女性も、同じように白い甲冑と赤いマントをみにつけていた。

スラッとした体型に、薄緑色の髪がよく似合っていた。

その女性はかつかつと金属製のブーツを鳴らしながらランドルネに近づく、むんずと襟首を掴み上げた。

そのままこちらをむく。

「私はこいつの同僚のジェシカ・マドリッドよ。ごめんなさいね、こいつの言った事は気にしないでいいわ、一種の病気なのよ。すぐに持って帰るわ」

心から頼む。もって帰ってくれ。

「ちょ、ちよつと、まってくれジェシカ。やっと見つけたの、彼なら、彼を副官にしたいのだ！」

「いい加減にしないさい、騎士のあなたが騒ぎをおこしてどうするのよ。貴方は強引すぎるのよ、後でやり方ってのを教えてあげるから今日は帰るのよ」

そっぴりなりズルズルとランドルネを引きずって行ってしまった。なにか一瞬不吉なセリフが聞こえた気がするが…、いまは考えたく

ない。

「お、おじさん、いまの」

「ぼうず、人生にはな知らない方がいいってこともあるんだぜ」

アッシュと店主がそんな話をしていた。

Round 2 - 4 (後書き)

続かない！

そう思って置かれた方がよろしく思い（以下略

自分で考察するー、この小説の欠点。

そのいちー、くどい。

そのにー、セリフの主体がだれかわからん。

そのさんー、誤字多すぎだばあろう。

言ってて悲しくなってきた…。

Round 3 - 1

宿での騒動で精神的に疲れてしまった。

かといって、ギルドに行かぬ訳にもいかない。

そんなこんなで私は気乗りしない足取りでギルドへとやってきていた。

立派な建物だ。

そう思いながら中へ入る。

入ってすぐ部屋の中にいる冒険者達がさりげなく視線を投げてくる、がすぐに視線は感じなくなる。

だが幾人かがいまだ私に注意を払っているのを感じる。

私はそれを無視するように店内を見渡し、新規登録窓口と書かれたカウンターへと足を向ける。

冒険者達が私を観察しているのは、まあ一種の通過儀礼だろう、自分たちのテリトリーに入ってくる奴がどんなやつなのか気になるのは、私は分かる気がする。だから気にしないことにした。

「すまない、登録したいのだが」

窓口に立っていたのは可憐な少女だった、服装がなぜかメイド服だったが。

「はい、冒険者ギルドへようこそ。当ギルドは新しい冒険者様を歓迎いたします、つきましてはこちらの用紙にご記入をお願いします」
礼儀正しく一礼した受付嬢は一枚の用紙と筆をさしだしてくる。

適当に埋めようとして気付く。

こちらの文字は読めても書けないことを忘れていたのだ。

私は恥ずかしげに切り出す。

「・・・すまない、代筆を頼んでも？」

「ふふっ・・・畏まりました。それではお名前からお願いしますね」
「ああ」

受付嬢は上品に笑いながらも綺麗な字で代筆してくれた。

「はい、記入欄は以上です。虚偽の申請が発覚した際にはギルドから追放の後、国へと報告させていただきますので、再度ご確認ください。うつかり間違ってしまったなんてことはございませんか？」

あまりににつこりと言うので一瞬分からなかったが、”嘘を言ったら承知しないぞ、謝るなら今のうちだ”と遠回しに言っているらしい。

大丈夫だ、嘘など言っていない。

ばれなければそれは嘘ではないのだから。

「それでは最後にこちらに手をお乗せ下さい」

そう言つて魔法陣の刻まれた金属のプレートが上部についた装置を差し出してくる。

「・・・これは？」

「ご存じでは無いのですね。失礼しました、こちらは個々人の魔力波動を読み取る装置でございます、これで波動を読み取る事で個人の特定が可能となります」

「わかった」

個人認証装置か・・・、だが必要なことならば仕方がない、そう思つて手を乗せる。

「・・・はい、大丈夫です。以上で申請は完了でございます。あとは登録が完了するまで掛けてお待ち下さい」

「了解した」

そう言つと受付嬢は奥に引つ込んでしまった、登録に行ったのだろう。

さて大分時間が掛かるのだろうか、まあお役所仕事が遅いのはこの世界も一緒で・・・。

「お待たせしました」

「・・・早いだろう！」

「私どものモットーは誠実に迅速に、でございますので」

なんか釈然としない物を感じる。

「それではこちらがトーヤ様のギルドカードになります、無くされますと高額の手数料が掛かりますのでご注意ください、続けてギルドの詳しい説明に入らせて頂きますがよろしいですか？」

「ああ、頼む」

「はい、当ギルドでは様々な依頼が毎日舞い込んで参ります、それらをクエストと言う形で冒険者の皆様にご提供させていただいております。

詳しくはこちらの冊子をお読み下さい。

また当ギルドはランク制を敷いております、これは冒険者様の实力にあつたご依頼をこなしていただくため御座います。トーヤ様は規定道理Fランクからのスタートとなります、依頼をこなすか、格上のモンスターを討伐なされる事により十分な実力を御証明なされますと、ギルドの判断によりランクの昇格を行わせていただきます。また一度ご依頼を受けた際はその信頼に掛けて途中で投げ出すことのないようギルドは信じております、手の余る場合は一度ギルド職員へご相談をお願いいたします。決してギルドの信用を失墜させる行動は厳にお慎み下さいませ、懲罰の対象と成ります、以上でございます」

流暢な口調で一息にそう言い終える受付嬢、すこし息を整えた後再度口を開く。

「他に何かご質問がございますか？」

そう言つて彼女は何かの金属で出来たギルドカードを差し出してくる。

名刺サイズの薄いカードだ、右上に穴が開いている、紐でも通せという事だろう。

カードには私の名前と登録地としてこの町の名前が書かれている。

「とりあえずは・・・ああそうだ。これはどこへ持つて行ったらいいんだ？」

私はそう言つて懷からオーガの討伐証明書を受付嬢へと渡した。

「はい、こちらは・・・はうつ?！」

あんなにもクールビューティーな雰囲気を纏つていた受付嬢が紙を開いて中を確認した途端に素つ頓狂な声をあげる。

「はわわわ、ちょ、ちよつとお待ち下さいね！」

ドタドタとそう言い残して裏へ走つていく彼女、奥で彼女が”支部長”、支部長はどこですかああああ”と大きな声を出しているのが聞こえてくる。

私はあまりの受付嬢の変貌ぶり声もでない。

ふと気付くと後ろの壁際のテーブルに座っていた冒険者達が、いつもアーレちゃんは可愛いねえと話しているのが聞こえる。

ここでは珍しい事では無いらしい、あんまり深く考えない事にする。しばらくしてアーレと呼ばれていた受付嬢が戻ってきた。

「あ、あのトーヤ様。支部長がお会いしたいそうです、奥まできてくださいませんか?」

慌てた様子は無いが、クールとは言い難い表情をして聞いてくる。断る理由は思いつかない。

「まあ手短に頼むよ」

「は、はい。では、こちらです。」

彼女に連れられて奥二階にある部屋へと通される。

奥へと通される際、部屋に居た冒険者達が何事かと騒いで居たのが見えた。

具体的には省く、私も延々と偉いさんの話を聞かされて眠りそうだった。

要はこのお偉いさんにえらく感謝されて報酬を受け取った、それだけだ。

ついでに何もせずにランクがCになった、本当はもっと昇格しても

いいらしいのだが、私が断った。
いきなり上がっても戸惑うだけだ。

私はギルドの受付ホールへと戻ってきている。
気付けばもう日が沈んでしまっている。

冒険者の姿も減り、ちらほらとしか見えない。

「あ、あのう……」

声を掛けられ見ればさきほどの受付の少女が後ろに立っていた。

「まだなにかあったか？」

「いえ、そうじゃないんですけど、本当にCで良かったんですか？
心配でもしてくれたのだろうか？」

普通に考えれば馬鹿な選択だしな。

「ランクか。かまわん、どうせ冒険者を続けるかもわからん」

「そんな！もつたいたいですよ、高ランクになれば報酬は金貨になるんですよ！あなたなら一攫千金だって夢じゃないのに」

「ふむ、聞くのだが……やはり金貨は価値が高いのだろうか？……
か？」

「な、なにいつてるんですか、決まってるじゃないですか！庶民には一枚でも大金です！」

「やはりそうか……ではオーガの討伐報酬は相当な額なのだな……
」

オーガの報酬だと言われ金貨を30枚も貰ったのだ、実感はなかったのだが大金であるらしい。

「今までどんな生活してたんですか！まさか貴族のおぼっちゃんとかだったりするのですか……？」

「いや、そんなことはないだろうよ。ただずっと遠い所で生活していたのでね、ここの常識に疎いんだ」

そう言う私の顔を見ていた受付嬢だったが、急に意気込んだ顔をすると私の腕を取って歩き出した。

「トーヤ様は放っておくと騙されそうです、あなたみたいな実力者

に便宜を図るのもギルド職員の仕事です、私が責任をもって常識をお教えたします。こっちです！」

そう言うとするすると奥の小部屋に連れて行かれてしまった。

何人かの冒険者に唖然した顔をされていたのが見えた。

私も唖然としていた。

そして私はいま、アーレと名乗った少女から常識という科目のレクチャーを受けている。

「いいですか、金貨一枚あれば一人なら半年遊んで暮らせるんですよ！大金なんですから」

「そ、そうなのか。」

「そうです！」

やけに熱の入った口調のアーレ、みぶりてぶりもどこか芝居がかった。

そんな彼女に私は圧倒されっぱなしだ。

「う、うむ、理解はしたが、実際どの程度なのだ？」

「大丈夫です、きちんと一から説明いたします」

「ああ頼む・・・」

「まずですね、貨幣の種類はご存じですか？じゃないですよね」

「すまん、銅貨と銀貨と金貨しか見たことがない・・・、というかこれ以外にあるのか？」

「ありますとも、王国銀貨に王国金貨です。トーヤさんの言っている銀貨は流通量は多いくせに価値が一番低いニウラム銀貨の事です、王国銀貨ならば一枚でニウラム銀貨50枚分の価値があります、金貨は王国銀貨20枚、王国金貨は金貨10枚分の価値なんですよ？」

つまり計算すると、金貨一枚でニウラム銀貨1000枚分か、やつと実感のもてる数になってきたな。

「大金って理解しましたか？」

「なんとなくだが感覚はつかめたよ、質問なのだが一般的な家庭の収入はどの程度なのだろうか？」

「えっと、そうですね。んー、平均的な人で一年で金貨一枚分ぐらいでしょうか、ギルドは高給なのでもうすこし貰えますけど」

「つまりオーガ一匹で年収の30年分か・・・、確かにすごい額だな」

「オーガはそれだけ危険なモンスターだったんですよ、本当なら死人を覚悟してCからBまでかき集めて当てるつもりだったんですから。それを一人で倒しちゃうなんて、全然Aランクと名乗っていいんですよ！凄いですから！」

「そう言われてもねえ、それに死人を覚悟してって、そのAとやらに出張って貰えばすむんじゃないかったのか？」

「何言って・・・、はあそうですね。それも説明しなきゃだめですよ。あのですね、今この町にA-以上は居ません、ギルドは大陸中にありますが、ここアラミス王国に限るとです、A-以上の冒険者の数は20人を超えません。」

今回もオーガの動きが速すぎて間に合う距離じゃなかったんです、手配されていたランクAの方は前に目撃された地点へ移動している最中だったから連絡が遅れますし、新規に手配ではさらに時間が掛かってました。

それにです、A-も含めてですが、Aに成るといふのは生半可な事じゃないんです、B+までは上がってこれてもそこで壁にぶつかって燻ってしまう冒険者がほとんどなんですよ。だからトーヤ様はすばらしい活躍をなされたのですよ、だからその・・・ランクAという栄誉を自ら蹴ってしまうなんて悲しい気がして・・・」

そういつて下を向いてしまったアーレ、まだ出会って間もないが、彼女が本心から私の不利益を案じているのが伝わって来て、彼女のそんな優しさが嬉しかった。

「ありがとうアーレ、だがそれならばなおさらだ、私はあのオーガを確かに倒しはしたが私も無様に返り討ちに遭ってしまっただけ、私もまだまだ未熟さ。ならば今度は傷一つ受けずにオーガを倒してランクAになろうじゃないか、君のためにも」

そう言いつつ、なんとなくだが頭を撫でておく。

難民キャンプの子供達はこうされると喜んだのを思い出したのだ。

アーレは驚いた様な顔をしたが、別に嫌がりはしなかった。

「わ、私のためにでひゅ、ですか?!」

「ああ、なにもう一匹しとめればいいだけだ、まかせろ。その時はまっさきに君に報告しにこよう、約束しよう」

「ほ、本当ですか!約束ですよ」

その様子があんまりにも可愛いのでしばらくで続けていたら、さすがに子供じゃないと怒られてしまった。

「でも、今はお勉強です!」

「続けるのか・・・?!」

「当然です、今夜は寝かせません」

「さて、そんな言葉は女の子が言ってはいけ・・・」

「つべこべ言わずに私の話を聞くのです!」

「サ、サー。イエッサー!」

なぜか彼女から士官学校時代の教官と同じ気配を感じた。

やけにテンションが高くなった彼女が醸し出す熱気に当てられて、私もずるずると逃げ出す機会を失ってしまい、見事に翌朝まで彼女の講義を聞くことになる。

内容は有意義だったが、夜にやる必要はないだろう・・・。

その後朝になって宿にもどると追加料金をはらってベッドに倒れ込んだ。

D o n o t w a k e u p .

そのまま寝続けて起きたのは翌日の朝であつた。

階下の酒場兼食堂へ降りていくと、アッシュが待ちかまえていたように私のそばによつてきた。

「おじさん!昨日は部屋から出てこないから心配しちゃったぜ」

「すまん。一昨日が徹夜でな、いまさっきまで寝てたよ」

「だらしねーな、一日ぐらい寝ないくらいで」

「まったく、戦場ではさらにあった事なのだな」

「まあいいや、頼みたいことがあるんだ！」

「なんだ？ああ、話聞くのは食事しながらでもいいか」

「かまわねーぜ」

そのまま料理を頼んでから席へと着く。

私の対面にアッシュは腰掛けた。

程なくして料理が運ばれてくる、パンとコーヒーと目玉焼き、それにサラダ。

そのどれもがビッグサイズなのを除けば普通のメニューだ。

「それで、どうしたんだ？」

「実はさ、おじさん一昨日はギルドに登録申請にいったんだろ？」

「ああ、そうだが」

「そうか、それでランクはいくつになったんだ！BかB+？それともランクAになったのか？」

なるほど、好奇心という奴か。

それに教えても害にはならんしな。

「残念だがCランクだよ」

「まじかよ！だっておじさんオーガを倒したんだろ？」

「あんまり言いふらさないでくれよ、あれは偶然が重なった結果さ。そんなたいした事じゃない」

そうたいした事ではない。装備が整いつつある今ならば。

アッシュはなにか言いたげだったが、すこし迷った顔をしたあと”

まあCでも条件はみたしてるか・・・”と自分に納得させる様につぶやいていたが、すぐに顔を上げて口を開く。

「おじさん、頼みつてのは他でもねえ。俺がギルドに入る為の推薦人になってくれ！」

その言葉が聞こえたのだろう、マスターが置くから出てきた。

「ぼつず、まだあきらめてなかったのか。おめえにはまだはええよ、あと3年は我慢しな」

「そんなことはねえ、俺だって角ウサギやイノブー程度なら狩れるし、ウツドウルフだって数がすくなきゃなんとかなる！」

「わかんねーのか、そんなことを言ってるようじゃ到底冒険者なんか勤まる筈もねえ、なにも成るなといってるんじゃない。すこしの間我慢しろっていったんだ」

「それじゃ遅いっていったんだよ！おじさん！頼むぜ、推薦人になつてくれよ」

「まってくれ、ギルドに登録するには推薦人が必要なのか？私はいらなかったが・・・」

私は当然の疑問を口にする、答えてくれたのはマスターだった。

「そりやおまえさんが大人だったからだ、ギルドは信用を重視するからな15以下の奴が登録するにはCランク以上の推薦人が必要なのさ。こいつはまだ12だからな、おまえさんからも頭を冷やすように言つてやつてくれないか」

なるほど、確かにだ。

この世界では15歳から一人前と扱われる（アーレ談だ）、それより前は子供というわけだ。

子供を戦場に送りだすならある程度の実力者が認める必要があると考えているのだな。

「話しぶりを聞くともう何度も狩りに行ったことがあるようだが、どうしてもギルドに所属する必要があるのか？」

「ある！ギルド員になれば定期討伐クエストをうけられるようになるし、採取物だってクエストの方が高く売れるんだ。なあたのむぜおじさん！」

私はどうしようかと迷つてマスターを見る。

だがマスターは私の目を見つめているだけだ。

しかたない、自分の考えでいこう。

「アッシュ、私が戦う術を学ぼうとし始めたのも15歳からだつた、

お前はまだ若い。死に急ぐことはあるまい」

アッシュは馬鹿じゃない、むしろ利発な少年だ。

簡単なクエストならば達成してみせるだろう、だがどこかで間違いを起こしそうな、そんな危うげな感じがしたのだ。

だが、私の言葉を聞いたアッシュは落胆した顔を見せると、

「わかったぜ、くそつ。おじさんならわかってくれると思ったのに！もういい頼んだ俺が馬鹿だった！」

そう言ってキツと私たちを睨むとそのまま飛び出してしまった。

「お客人変なことに付き合わせちまったな。だがあいつも悪いやつじゃねーんだ、ちよつとあいつの母親の体が悪くてな、薬代をああやって稼いでるんだ。」

そこで、一呼吸いれるマスター。

「俺もあいつの両親とはしらねえ仲じゃねえから雇ってるが、あいつは冒険者になってもっと稼ぎたいとおもってたんだろ。実際あいつなら簡単な依頼だったら今でもこなすだろう、けどな、今のままじゃ絶対あいつは分不相応な相手に手をだして大怪我するに決まってる、それをあいつ自身が分かるようになるまでは俺が手を回して止めてんだ。町の冒険者は大抵顔見知りでな、あんたも止めてくれて助かったぜ、事前に言っておけばよかったんだがな」

アッシュも腹が減ればもどってくるだろう、マスターそう言つとどこか悲しげな目をしながら仕事に戻っていった。

私は残っていた食事を頬張りながら、何事もなくアッシュが戻ってくれば良いかと考えていた。

飛び出していく時のアッシュが何かを決意した顔に見えてしかたがなかったのだ。

「杞憂であればよいのだが・・・」

私はそう思いながら村へと戻る準備を始めることにした。

昼ごろ準備を終えた私はマスターにチェックアウトを告げる。

「また次もうちでたのむぜ！」

「ああ世話になった・・・アッシュは・・・？」

「まだかえって無いが、なに大丈夫さ。気にしなさんな」

「そうか・・・、まああいつの事だ、無謀な事はしないと信じよう。では失礼するよ」

「おう、じゃあな！」

手を挙げて答えながら宿を後にする。

私はその足でギルド支部へと向かった。

アーレは一昨日と同じように受け付け窓口にたってくれていた。

「アーレ」

私が声を掛けるまでもなく、彼女は私に気付いて手を振ってくれていた。

「あれ・・・その荷物・・・かえっ・・・ちやうの・・・？」

「その・・・今回はすぐに帰ると約束してきたのでな」

「そう、・・・でもまだすぐ来てくれるよね！」

「心配するな、約束は守るさ」

「うん！」

妹が居たらこんな感じだったのだろうか、とりあえず頭を撫でながら別れの挨拶をしてきた。

なぜか彼女と会話している間、支部に居た冒険者達からものすごい形相で睨まれ続けたのだが、まったく心当たりがない。

その後は村へと帰るため市場で食料や水を買ひ込みつつ外門へとやってきていた。

市場でかった果物を囓りつつ門を守備する兵士に会釈して外へ出ようとして、兵士に止められた。

最初はまた面倒ごとかと思ったが、私に非があるようではないらしい。

申し訳なさそうに、いま旅人を外に出さないように通達が出始めた直後らしい、詳しいことは追って伝わってくるので、いまはすまな

いが市内に止まって欲しいと申し訳なさそうに謝られた。

そう言われてしまうと強く出れない、頷き返して門の近くの城壁に寄りかかって時間をつぶしていると、城壁の上を回ってきた兵士が何事かをしゃべる声が聞こえ始めた。

「おい、通達の原因なんだがな、草原側警備の連中が言ってるんだが商隊の一つがぼろぼろになりながら町に逃げこんできたそうだぞ」「あつちは隣国側だろう？国境には王国軍の城塞もあるんだ、なんでそんなことになるんだよ」

「いやなんでも草原で異常な数のモンスターに襲われたって、いま王国軍の奴らが慌てて飛び出してたってさ」

「まじかよ・・・俺たち守備隊も駆り出されるのかな？」

「わからん、まだ情報が少なすぎる。とりあえず市内には警戒令が出さされるそうだ。そんな状況で外へ出たがる奴はいないだろうが、外への通行は全面禁止だそうだ、それと朝から外に出た街の奴はいないか？」

「いやこつからはいないな、全員隣町を目指すって言ってた」

「そうか、実はな俺のそこから子供が一人飛び出していったきりなんだ、ほらいつもできる野営地で客引きやってるあいつだ」

「あいつか！どこにいったかわかるのか？」

「いや、わからん。呼び止める暇もなく飛び出しちゃってな、結構あいつ外に狩りにいったから、つい俺もいつものことだろうとそのままにしちゃってな・・・くそつ。やっぱり俺ちょっと探しにいつてくるぞ」

「馬鹿、担当があるだろ」

「でも、あいつだけなんだ戻ってないのは」

私は自分の嫌な感が当たってしまったことが、胸をきつくしめあげた。

やはりあの時に後を追っていれば良かったのだ、いやこんな事に成るぐらいならいっそ推薦していたって・・・。

”ゴスッ”

私は城壁に頭突きをかましていた。

おーけー、悩んでいたって仕方ない、起きてしまったことは変えられない。

少しは冷静になってきた。

問題ない、まだアツシユが草原に行ったとは限らないのだ。

私はすこし城壁からはなれると上で押し問答をしている兵士達にむかって声をあげる。

「おい、その二人。俺がいく、だからもうすこし話をきかせてくれ！」

探しに行くと言い出した方が俺に気付いく。

「冒険者か！だが・・・これは守備隊の過失であって・・・」

「俺はその少年の客引きに捕まった人間なんだよ、知らない間柄じゃない、俺に行かせてくれ！」

「・・・おい、通行禁止令もでてるんだぞ」

元々いた兵士の方が諫めているようだ、だがそれでは困る。

「頼む、あいつに死なれると寝覚めが悪いどころじゃないんだ」

言い出した方の兵士が悩んだ顔をしていたが、意を決したようだ。

「わかった、頼む。俺たちにはここを守るっていう責務がある、だがそれと同じくらい市民を救う義務もある。頼む、まずは隣の門まで来てくれ。そこから俺が部隊長に取りはからう」

「わかった」

そこからは迅速に行動を進めた、門の守備隊長もあの兵士がしっかりと説得してくれたらしい、むしろ隊長も気にしていたのだろう、頼むと短い言葉だったが、確かに任せられた。

兵士達の話ではアツシユはいつもはこの門からほど近い森へと狩りにいつているらしい、だが兵士の一人がアツシユが向かった方向は森じゃないと言い出して一悶着あった。

「俺は確かにみたぞ、あのぼうずは確かに右の方に向かっていった、あっちにあるのは・・・草原だ・・・」

実際なにか起きているのは草原らしい、アッシュがいつも通りに森へと行ったのなら何事もなく帰ってこれるはずだ。

ならなにかあった際に助けが必要になるのは草原へと行っていた場合だ。

私はアッシュがもどってきた場合の保護を頼むと、草原方向に向けて猛然と走り始めた。

スタミナと回復力アップとSAB-1b（ナノ素材で作られたブーツ）のアンロックのお陰でほとんど息切れすることもなく相当の速度を維持したまま駆けている。

途中でまだ新しい靴跡を発見し、ずっとその後を追っている。

だがそれも道自体が草に覆われ始めると跡を見つけるのも困難になってくる。

だが今度は踏みつけられたように曲がる草が目印になってくれた。もちろんこれがアッシュの物だとは限らない、だが、それでも信じて後を追うしかできなかった。

途中で私は疑似HMDを開くと隊長用装備である偵察ドローンをアンロックした、こいつは最新のジャイロプロペラで宙に浮かび、隊長の後をくついて飛びながら、搭載されたレーザーや赤外線センサー、特に超音波と聴覚センサーで敵兵士の姿を見つけ出す分隊支援機だ。

その性能はあなどれない、建物の中に居ようが正確に敵の位置を判別するのだ、野外であつたならその精度たるや、こいつのお陰で助かったこともなかある。

今はその性能のすべてを生体反応検知へと割り振る。

これで多少は違うはずだ、効果範囲は実戦では半径60mであつたが、それはECMが絶えず行われていた私の世界での話、電波など何一つないこの世界ならもうすこし感度もいいはずだ。

私は疑似HMDに表示される探查結果を視界に端に納めながらひた走る。

門を出てから2時間ほど走っただろうか、探査機がいくつもの反応を感知する。

複数と言ふことに警戒しながらそちらへと進路を変更する。

注意をしなければ絡まった草に足をとられてしまふ、速度を上げられることに苛立ちつつ近づくとその反応は王国軍と呼ばれていた兵士達の物であった。

「その奴、止まれ！」

「っち、こんなときに・・・」

だが相手は数十人もいる一団である、抵抗するのは簡単だが敵対するメリットは少ない。

「貴様、こんなところで何をしている」

一人の兵士が武器を構えたまま近づいてくる。

私はできるだけ敵意が無いことをしめしつつ答えた。

「街から飛び出していった少年がまだもどっていない、草原に向かったという証言もあったんで私が追いかけている」

「事情は理解した、だが現在一帯には非常警戒令が発令されている。我々に引き継いで君は帰りたいまえ、ん？後ろにとんでいるのはなんだ？」

「悪いがこっちも、はいそうですかと帰るわけにもいかないんだ。

後のは・・・気にするな私が作った魔石道具だよ」

「魔石道具か、創造工芸師^{クラフター}か、それにしては見た目が・・・、いやそれはまあいい。通行だったな、悪いが認めるわけにはいかん、従わぬのなら拘束させてもらうしかないぞ、おい」

その言葉で数名の兵士が駆けてくる。

っち、なぎ倒すのは楽だが、どうする。

そこまで考えたところでどこかで聞いた声がした。

「やめなさい、彼は民間人ですよ」

それは宿で出会ったジェシカ・マドリードであった。

彼女は精悍な顔つきをしたランドドラゴンに騎乗していた、まさに

彼女が騎士である証であろつ。

「っは、しかし・・・」

「彼は私の知り合いよ、責任は私が持つわ、あなたは下がちなさい」
「失礼しました！任務に戻ります！」

兵士をそう言うに戻っていつてしまった。

「あなた・・・いつたいどうしたの？いまここは危険よ、帰った方がいいわ」

ランドドラゴンの上からであつたが彼女の言葉には氣遣う心が感じられた。

「そうもいつてられん、まだ確實じゃないが知り合いの少年が草原にはいつていつたらしんだ。それも大分前にな、俺はそいつを無傷で連れ戻さなきゃならん」

「あなたもまたやつかいな事に頭をつつこんでるのね・・・、いいわそういうことなら私たちも見過ごせる事じゃない。ここで私たちは街道を封鎖しているの、その少年を見かけたら捕獲しておいてあげるから、ここは任せなさい。私たちの本体はもっと先へと進んでいるわ、あなたも後を追うなら特別に許可してあげるからいきなさい。正し注意するのよ、商隊がゴブリンの大群を見たつていつてるから、尋常な数じゃないらしいわ、国境の要塞から也要撃部隊が出ているはずだから負けはしないでしようけどね」

「助かる、今回の事は借りておくよ」

「そんなことはいいいから、さつさといつてきなさい」

ああと頷いた私はまた駆けるように走り出す。

街道へと道を合流したお陰で、多少は整備され大分走りやすい。

「なにあの速さ、まるでつむじ風みたい・・・」

この時トーヤの姿を見送つていたジェシカはトーヤの走りをそう表したと周りにいた兵士が証言している。

Round 3 - 2 (前書き)

Round 3 - 1

Round 3 - 2

一纏めだと長すぎる気がしたので分けました。

Round 3 - 2

私は走っている、まだ王国軍の本体には追いつかない。

だがペースが落ちることはない、むしろ先ほど安全基準ギリギリまで投薬した結果、ペース自体は上がっているといい。

時折偵察ドローンのセンサに反応があるが、どれもが動物か小さな魔物のものだった。

アッシュのやつはいつたどこまでいったのか・・・、まさか街道から外れて草原内を進んでいるのか？

そこまで考えて目の前から人の挙げる声と一緒に不気味な雄叫びが唸っているのに気付く。

人の耳にも聞こえるのだ、しっかりとセンサにも前方1000m先と表示がでている。

草原といっても真つ平らな訳ではない、上下の起伏が存在する。ちょうど小高い丘が前方を塞いでいるようでまだ様子が伺えない。

焦りつつも丘を登り切って、そして私は驚愕した。

一面、視界にうつる一面に、緑色をした草ではけっしてない何かが蠢いているのだ。

「あれが、ゴブリンか！」

誰に許なくつぶやいてから視線を手前にもどすと、白い甲冑を着た騎士がランドドラゴンに騎乗して兵士達を指揮していた。

まだゴブリンの波は彼らには届いては居ない。

兵士達はあの数を前にして及び腰になっているようだが、逃げ出す奴はいないようだ。

立派なもんだ、戦意を喪失してそうくずれになってもいいような光景である。

たとえ相手がゴブリンであってもだ、アーレに教わったには、ゴブリンは一匹一匹は大したことはない相手らしい、彼らがやっかいな点は群れることだと話していた。

それでも大抵はC - からD + 程度数人でなんとかなるらしい。

だがさしもの彼女もこれだけの数を想定してはいなかっただろう。

私は騎乗した騎士の中にランドルネを見つけた。

知らない者よりは彼女の方が話しやすい。

私は止めた足を再び動かし彼女へと近づいていく。

彼女の周りにいた女性兵士の一人が気付いたようだ。

私の接近を制止しようとして、逆にランドルネが私に近づいてきたことで不発におわってしまう。

「トーヤ！来てくれたのか！やっと私の副官になると決めてくれたのだな」

なにか言いたげな女性兵士を無視してランドルネはランドドラゴンを降りると私へと近づいてきて、手を握っては満面の笑みを浮かべている。

だがさすがにいまは付き合っている暇がない。

「悪い、まったくこれっぽちもそんなつもりはない。知り合いの少年が草原に入り込んだ可能性がある、それらしい奴をみていないか？」

「そんな照れ隠しはしなくても・・・、まっしてくれそれは本当か？」

「本当だ、見てないか？」

彼女はすこし逡巡した後、見ていないと答えるが

「さて、兵にも聞いてみよう。ネリネ聞いていたな、配下の兵に聞いてくれ」

「はい、お待ちください」

さきほど私の接近を遮ろうとした女性兵士だ、短く答えると兵士達に話を聞き入ってくれた。

「ふむ、まだゴブリンとの接触には時間があるが・・・、さすがにあの数では押し切られる可能性がある」

「押し切られるとどうなるんだ？」

「街へとゴブリンが押しかける、城門を閉じれば大丈夫だろうが私たちは辛い戦いになるな、だがまああの向こうには友軍がいるはず

だ。そう悲観することもない」

「そうか、悪いが私は私の事情を優先させてもらっぞ」

「っふ、仕方がない。好きにしろ」

「ランドルネ様、聞いて参りました」

タイミング良くネリネが戻ってきた。

「なにか見た奴はいたか？」

「はい、つい少し前に子供の歓声を聞いた様な気がするという兵士が数名おりました」

「なぜそういう報告がすぐに私に上がってこなかったのだ」

「申し訳ありません・・・、さすがに彼らも空耳だとおもったよう
でして」

「どちらから聞こえた」

「あちらの丘を超えた先だそうです」

そういつてネリネが指さすのは私が駆けてきた方向とはまた違い、
展開する軍の左斜め前に存在する小高い丘だった。

ゴブリンがすぐそこまでせまっている地点だ。

私はそう判断するとすぐに全速力で駆けだしていた。

「ネリネ！部隊をまかせろ！」

「ラ、ランドルネ様！おやめください」

だが既にランドルネはランドドラゴンにまたがって駆けだしていた。

「問題ない、すぐそこだ！」

そう言うなりランドルネは愛竜の手綱をひくとぐんぐん加速してい
く。

あっという間にその姿はトーヤと肩をならべてしまった。

私は気付けば隣にランドルネがランドドラゴンに跨って併走していた。

「トーヤ、のれ！」

「助かる」

私は彼女が差し出した手を握ると鎧を踏み、彼女の後ろに跨りしかりと彼女の腰をつかんだ。

「ふふ、くすぐりたいぞトーヤ」

「そんなことを言ってる場合じゃないだろう、あの丘の先はどうなってるんだ？」

「盆地だ、あの中にいるならば丘に上らない限りゴブリンどもには気付かないな、いればだが」

「どっちにしても確認するだけだ、頼む」

「任せろ、しっかり捕まっているよ。いくぞガープ！」

そう言うお手綱を操作した彼女と私をのせ、ぐんぐんと加速していく、相対的にゴブリンとの距離が縮んでいくが気にしてはいられない」

ゴブリンどもの眼前をフライバイするように駆け抜けると丘を駆け上がっていく。

そして、天頂部を通り過ぎ、丘の先が見え始めるようになって気付く。

アッシュが一人、先行していたのであろうゴブリン数十匹を切り伏せていた。

残っている最後の一匹をちょうどアッシュが切り伏せた所で、私たちの接近に気付いたのだらう。

アッシュは驚きながらも無邪気な笑顔で手を振っている。

だが、みればゴブリンの本体が前方右手の丘を超えたようだ、盆地にいながらやつらの先頭が見え始めた。

「アッシュ！そこでじっとしている！」

アッシュはいまだ状況がつかめていないようだ、小さなゴブリンの

群れを壊滅させたことで気も高ぶっていたのだろう。

「大丈夫ですよ、ゴブリンぐらい。ほらまた懲りもせずやってきた。俺だつてゴブリンぐらいは狩れるんだつて証明してみます」

そついうとアッシュは剣を構えて、一部が見えているゴブリンの本体へと駆け寄っていく。

アッシュの位置からでは、小さな群れにしか見えないのだろう。

「アッシュ、馬鹿、もどるんだ！」

「っち、あの少年周りが見えておらんな、一発ぶん殴つて連れ戻すぞ」

だがいかにランドドラゴンが早くとも限度がある、アッシュの元につくまでにアッシュはゴブリンへとどんどん駆け寄つていつてしまっている。

じりじりとしながらランドドラゴンが追いつくのは待つしかない、実際は20秒も立っていないだろう、だがその間にもアッシュは岡を駆け上がり先頭にゴブリンを切り伏せ始めていた。

あの位置からならばゴブリンの大群が見えるはずだ。

だが、眼前のゴブリンにしか注意が言っていないアッシュには見えていないのだ、その後ろにつづくゴブリン達だ。

アッシュは斬つても斬つても減らないゴブリンに押し戻され始めていた。

押している時はいいが一度崩れるとはやいのが集団戦だ。

それにアッシュはいまのいまに後ろに控えるゴブリンの群れにやつと視線がいったようで、その顔が恐怖で彩られている。

まったく、後で説教だな。

だが、そのタイミングでランドドラゴンでゴブリンとの間に割り込む事に成功する。

私はアッシュの襟首を掴むと、それを確認するまもなくランドルネがまた手綱をひく。

息のあったコンビネーションでターンドリフトのごとくゴブリン達を蹴散らしつつもアッシュを確保することに成功した。

「お、おじさん俺・・・俺」

「今はいい、とりあえず生きていることに感謝しておけ」

ランドドラゴンの上に引つ張りあげて倉の上に座らせてやる。

最後の最後に見たであろうゴブリンの群れが頭から離れないのかずつとふるえている。

「まったく運のいいやつめ、トーヤに感謝するのだな。こいつが居なければお前死んでいたぞ」

容赦の無いランドルネはきつい言葉を言うが、それも彼女なりの優しさなのかもしれない。

だがだ、アッシュを助けたことで気を抜いた私は間抜けなことに、ランドドラゴンが草に隠れたくばみに足をとられた衝撃で鞍から降り出され草原へと転がり落ちてしまった。

「っあ・・・」

一瞬の浮遊間の後、地面へとたたきつけられる感触。

草とスーツのお陰で衝撃は思ったほどでもないが、それは致命的な時間のロスだった。

ランドルネは焦っていた。

「お、おじさん！お姉さんおじさんが！」

少年に言われるまでもなく、トーヤが落ちたのには気付いたがバランスを取ることで精一杯なのだ、ここで転んでガープが足にでも怪我を負えば万事休すだ。

「トーヤ！っく、ガープ踏ん張れ！」

だがそのかいもなくバランスはいっこうに回復しない。

端から見れば前進することなどなんとかバランスを保っているような走り方だろう。

だがその間にもゴブリンの群れは近づいていた、むしろアッシュに

殺された仲間の死体を見て興奮したのだろうか、奇妙な雄叫びを上げると今まで歩いていた奴らはその足で駆けだしはじめたのだ。
トーヤ！

落竜した私はふらつく意識をつなぎ止めながら、ゆっくり起きあがる。

ランドルネ達は遙か先でやっと止まることに成功したようだ、だが間に合うことはないだろう。

ゴ布林達は怒濤の勢いでなだれ込んできている、もはや距離としては30mも無い。

だがむざむざやられるつもりもない。

私はHMDを起動すると、援護兵の兵装を選択した。

一瞬の燐光ののち、私の手に”Shuko K-80”軽機関銃が出現する。

同時に私は疑似HMDから、”A12 Enforcer Sentry Gun”設置方自動対人機銃を数個取り出すと適当な位置に設置しHMD経由で遠隔起動する。

その時点でゴ布林どもは眼前までせまっていたが、起動したと同時に銃口を露出させたセンチリーガンがそれこそ正確無比に機銃の掃射を開始した。

私もShukoを持ち上げると近づく敵に向かって乱射しはじめ、照準などあつてないようなものだ、撃てばあたる。

私は銃身がオーバーヒートせぬように注意を払いつつも打ち続ける。銃に設置されたFCS（火器管制装置）により、残弾の表示はHMDに表示されるし、銃器のコンディションも用意に把握できるようになっている。

そしてこのShukoには高精度のスタビライザーが装備されており、自動で銃身の調整とそれによる弾道調整を行うのだ。

この機能により飛躍的に命中精度が向上している、それこそ軽機関銃であるにもかかわらず、一昔前の低反動サブマシンガンなみに集弾率がいいのである。

セントリーガンはいい壁になっている。

いずれは球が尽きて自爆するがそれまではまだ間がある。

ゆっくりと背を向けないようにShukoを振り回しながら後退する。

前だけでなく、左右からくる敵に注意しつつ鉛玉をプレゼントする。マガジンの弾倉は200発、それが尽きるたびに手早く交換する。

援護兵には他の兵士の弾薬を補充するための”Advanced Ammo Hub”大容量弾薬箱を装備している、いくらでも補充は聴くのだ。

Ammo Hubの中も尽きたら再度Hubを出現しなおせばいい。

馬鹿正直に手に持った武器で突撃してくるしか脳がないゴブリンは対処の巡さえ間違えなければなんとかなるようだ。

あまりの銃弾の発射速度に、一続きの独特の音になって聞こえる発射音を聞きながら私はほとんど後退していく。

ときおりAmmo Hubからグレネートを取り出すと放り投げたり、足下に落としつつ後退していく。

数秒後、すさまじい爆音を響かせながら緑のゴブリンだったものが空を舞う。

まさにそこは私の独壇場であった、私の後方ではランドルネとアッシュが啞然とした表情で私のハッピートリガーの様子を眺めている。技術の進歩は銃の至る所に応用されている、基本的な構造こそ火薬で鉛の弾を撃ち出すという共通した物だが、Shukoのもつポテンシャルは20世紀末のそれとは次元が違う。

Shukoは数十万発撃ったところで銃身の加熱にさえ気をつけて

いればジャム（弾詰まり）することもなく永遠と打ち続けられるだろう。

そしてなによりもだ、このshuko、軽機関銃でありながら撃つに気になれば片手で撃つことができるのだ。

時折急接近してくるゴブリンには急遽とりだした”Clark”シヨットガンを左手で操作しぶち込んでいく。

あとは肩にストラップでつるし、必要になったらまたうつ。

そろそろか、私は徐に空いた手で、途中まいてきたRDXリモート高性能爆弾の遠隔起爆装置を押し込む。

とたん私が移動してきた道に沿って大爆発が起こる、その中心にいたゴブリンは哀れにも原型すらとどめずに空高くふきとばされている、

一発で100匹単位でやれただろうか？

私はそれに満足するとまたRDKとグレネードを投げつけながら後退する。

気付けばランドルネ達の立っている地点まで来てしまったようだ。

包囲されないようにそれなりの速度で後進していたので当然ではあるのだが。

「ランドルネ！ぼうつとしてるんじゃない。下がれ！」

「あ、ああ・・・、いやまで、トーヤ早く乗れ。味方と合流する」
「わかった」

さしものゴブリン達もランドドラゴンには追いつけないぐんぐんと引き離していくのを確認して私はまたRDXの起爆スイッチを追いつ込む。

数十のRDXが一斉に炸裂し、ゴブリンに混乱と恐怖を与える。

吹き飛ばされたゴブリンは肉界となってまた別のゴブリンを押しつぶしている。

さらに嫌がらせのようにまいてきた”APM”非埋没式対人地雷が

その赤外線センサでゴブリンを感知し爆発している。
その旅にゴブリン達の進撃速度は鈍っていった。
私を追っていた一団が山形の形に突出していたのだが、先頭のペー
スダウンは後方で玉突き事故や縦列渋滞を引き起こす。
やつらの後ろも悲惨な事になっているだろう。

落竜した時はヒヤッとしたが、意外にもなんとかやってよかったと、
いまさらながらに胸を撫で下ろした。

だが、戻ってみればアラミス王国軍の方でもすでにゴブリン達との
距離は無いに等しかった。

王国軍の兵士達はまさに決死の覚悟の臨戦態勢である。

ランドルネが自分の部隊にもどるよりもはやく、ゴブリンの先頭が
王国軍の先兵に接触した。

「アラミス王国軍の誇りを示す！迎え撃てー！！」

「おおおおおお！」

何処かの騎士が味方を鼓舞すると、兵士達はそれこそ恐怖を払拭す
るよう大声を張り上げると自らの武器をふるってゴブリンの駆逐
を始めた。

「リーネ！いまもどつた」

「ああ・・・ランドルネ様！無理なさらなくてください。あなたが
怪我でもなされたら、当主様に顔向けができません」

「戦場で怪我をしないことがあるか、過保護なやつめ」

「我が隊もゴブリンを駆逐する、紡錘陣形をとれ、この数だすぐに
取り囲まる。そうなるくらいなら前だけ見て突撃した方が性にあっ
ている。そのまま敵陣をぬけ反対の友軍と合流する」

「っは、了解しました。ただちに」

そう言つとリーネはそばの兵士をつれ、兵士達の元へと駆けていく。

「お前はどつする」

ランドルネが私に聞いてきた。

アッシュはすでに救護兵が引き取っている、部隊の中央の一番安全な位置に彼らはいる。

そう簡単には死なないだろう。

「このまま逃げるって言っても、街に着く前にへばって追いつかれるだろうしな、乗りかかった船だ、反対へ抜けるんだろう？手をかすよ」

「ふふ、助かる。そしてそのまま私の副官になるのだから？」

「ならないぞ、だいたいリーネって立派な副官がいるではないか」

「彼女は借り物だ、私のじゃない。まあいい乗れ、いくぞ」

「・・・私が乗るのはいいのか？土気的な意味で」

「かまわん、私の副官なのだからな、私とそなたは一蓮托生だ」

「いまだけだからな」

私はそういうと彼女の後ろに跨る。

そして一度 ammo Hubを出し直したあと、Shukoを構える。その間にも陣形の変更は完了したようだ。

「ランドルネ様、変更完了しました。全面外周部から歩兵、魔法兵、弓兵と配置しています。とくに前面には盾持ちを優先して配置しました」

「完璧だ、ではゆくぞ、友軍の位置までゴブリンどもの屍の道を築こうではないか、ものども、臆するな！我らは誇り高きアラミス王国軍である！死に神が向こうからよけてくれるわ

！」

兵士達はその言葉に反応しがちやりと武器を構え直す。

「突撃！^{チャージ}！」

ランドルネの号令とともに彼女の部隊と隣接する騎士の部隊が怒濤の勢いで前進していく、前方にいるゴブリン達をまるで踏みつぶす勢いで剣を振るい槍で突き、左右から来る敵には魔法と矢をお見舞いし、部隊全体が一つの楔のように草原の向こうまで広がるゴブリ

ンの群の中を驍進していく。

ランドルネは部隊の殿に位置している、リーネが前方で指揮は取っているためできる芸当だ。

もちろん理由もある、私がAmmoHubからありったけのRDXとAPM、グレネードをまいているからだ。

部隊の進む速度に合わせて、後ろを取られないように適度に起爆していく。

もの凄い轟音が鳴り響くが、兵士の人たちは気にする様子がない。ありがたくはあるが、不思議な気もするのだ。

爆薬ってこの世界にはすでにあるのだろうか？

「ランドルネ、あまりみな音に驚かないが・・・そういうものなのか？」

「ん？ああ、そのサイズでその威力には驚いているさ、ただ魔法関連にはみんななれっこさ、攻城魔法とか一度みちゃうとな」

「そうか、まあならないんだ」

そう返事したまま私はまた起爆スイッチを押す。

ゴブリンの一部が反転してこちらを追おうとするたびに放り投げたRDXでその主力を殲滅していく。

あとはAPMが地味に相手のいやがらせになっている。

ゴブリンといえども数十回と繰り返せば学習するようだ、警戒しながら進もうとしてスピードが落ちるのだ、だがAPMが赤外線による起爆だとは理解ができないようだ、おもしろいように引かなかつてくれる。

あとはランドドラゴンの上からShukoを連射している。

最初は発射音に驚いていたドラゴンもいまはもう慣れたか、麻痺してしまっているようだ。

そんなことを何時間つづけただろうか、夕方に差し掛かる頃に友軍の姿が視界に写り始める。

彼らは彼らでゴブリンを破竹の速度で殲滅していた、魔法が唸り剣が煌めき、要塞の主力を投入したのだろう、その後方には東方もない量のゴブリンの死骸が横たわっている。

私たちは程なく彼らと合流することが出来た。

「リーネ！被害は」

「っは、重傷者こそいますが死者ありません、下手にうごかさなければ命に別状ありません」

「よろしい、所で要塞側の司令官はだれだと思っ？」

「おそらくマイヤード様ではないかと、まさか要塞司令のゲイル閣下がでてきていることはないでしょう」

「そうだな、そうであろうな…愚問であつた。だが私はあの男が苦手だ…」

「そんなこと言わずに挨拶ぐらいはしてきてくださいまし、しらぬ仲でもないでしょうに」

「だからこそだ、一つ生まれたのが早いだけで騎士学校では先輩風を吹かしたうえに、あいつのせいでもろくな目にあわなかった、とくに貴族学校の女子共のことなど…思い出ただけで腹が立つ！」

「はあ…いちおうお隣様なんですから、もうすこしなんとかならないのですか？」

「ならぬものはならん！そうだちようどいい、トーヤそなたもこいランドルネとそのお姉さんのようなリーネの会話をのほほんと聞いて居たのだが、お鉢がまわってきてしまったようだ。」

私が口を開くより早く。

「よしそうときまればさっさと行ってさっさと帰ってくるぞ」

ランドドラゴンに乗ったままだったのが災難だった、ランドルネにぐつつかまれると、そのままランドドラゴンに乘せられたまま連行されてしまった。

そこから先は正直思い返すのも億劫だ、その場のやりとりだけで把握してほしい。

「貴様俺のランドルネとどういう関係だ！」

「どという関係もくそもあるか、お前と私はただのお隣さんといただけだ、馬鹿者が」

「おお、ランドルネ、やはり美しいな。所で式はいつ挙げてくれるんだ？」

「人の話を聞かぬか！馬鹿者が！」

「はははは、ランドルネは恥ずかしがり屋だな」

「いっぺん死なぬとわからぬようじゃな、まあよい。こやつはトーヤ、私の副官だ。ちなみにただの副官ではないぞ、我が家の家訓をそなたなら知っておろう？」

「ははは何を言って……、家訓と副官だと！？ま、まさかランドルネ、そんな奴と、そんな奴がいいのか？！」

「ああ、そなたなどより数十万倍良い。と言うわけで、私らは休憩した後ゴブリンの掃討へと戻るぞ。街は籠城しておるだろうし、ゴブリンどもが素通りしておるなら、追ってライゴ城の部隊や冒険者と共同して殲滅する、王都への伝令はでているのだろう。ならば言うことはもうない、失礼する」

「ラ、ランドルネ、ちょっとまってくれ、考え直すんだ」

「指揮官が意味もなく部隊を離れてどうする、さっさともどらんかうつけが」

「な……お、おのれトーヤと言ったな！俺は覚えたぞ、いづれいづれ決着をつけにいく！覚えていろよ！！お、おま、まで話せ引つ張るな……ひっぱるなあああ」

絶叫を響かせながら彼は彼の部下に引きづられていく。

また変な奴に名前を覚えられてしまったよ。

ランドドラゴンに揺られながら隊へ戻る途中だ。

「おい、ランドルネ」

「なんだトーヤ」

「あの家訓とか、副官ってどういうことだ？ なにか別の意味もあるのか？」

「心配するな、そなたが気にすることではない。なにそのうち分かる」

「なんだそれは、よけいわからなくなったぞ」

「なんでもジェシカが言うには、分からせない方がいいのだそうだが、私は別にかまわないのだがな・・・」

「まあ大した興味があるわけじゃないし、そもそもお前の副官にはならんのだから関係ない」

「そう言う出ない、我とそなたの相性は悪くない、むしろばっちりであったではないか、それにオーガを倒したという話も誠であるようだ、なんとしても私の副官になってもらうからな」

「はあ・・・私はべつに・・・」

「そういうなこれは前払い分だ受け取っておけ」

そういうと彼女はなにを思ったか自分の唇とを私の口元へと押しつけたのだ。

とっさに動かなければまちがいなく唇であった。

「馬鹿、逃げる奴があるか」

「おまえ、な、なあどういう意味での副官なんだ？ やっぱり聞かせてくれ」

「ふふふ、いったらう内緒だ」

その後は彼女は笑うだけで何もしゃべりはしなかった。
入らぬ知恵をさずけたのはジェシカのやつか？

あとで問いただす必要があるな。

その後数時間の休憩を取ったのち、私たちはゴブリンの追撃戦へと移り、そしてアグリライ籠城戦へと推移していく。

Round 3 - 2 (後書き)

続かない！

そう思っておいた方が精神衛生上よろしく思います。

ATOKはやっぱり使いやすかった。

最新版欲しいなー、現在はATOK2005使用です。

だがしかし、M・I・M・EやグーグルI・M・Eよりも数段使いやすいですね。

最近気付きました、登場人物の名前を間違えるのが特技のようです。もしかしたら今回もやってるかも・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5736j/>

とある兵士の受難と幸福

2010年10月31日20時18分発行